

卷頭言

素問名義附箋

戊寅立春 懸壺子

現代中国語学界の泰斗である錢超塵先生の名著『内経語言研究』の邦訳連載がようやく実現して良かった。この書は小生も入手以来座右を離すこと能わざる虎の巻であることは言を俟たない。冒頭、綿密無比の『内経』名義訓詁をもって始まるのも、書名解説を先とする訓詁考証学の伝統に則っている。只、小生些か愚見これ有り、本誌に邦訳が載ったのを機に、誠惶と謹みて言わせていただく。

全元起は素を五行の本、問を黄帝の岐伯に問うたのが所以とする。林億はこれを「義未甚明」として諱書などを引き、太素は質の始めである故に、黄帝、質の始めを問う、と解する。我が桂山先生も『素問識』素問解題で此の説を是とするのだが、錢先生は馬蒔、張介賓の「平素問答」説を採っておられる。

北宋天聖四年、夏竦の『銅人腧穴鍼灸図経』序に「雷公請問其道。迺坐明堂以授之。後世之言明堂者。以此由是」とある。明堂で授けたから『明堂経』とするのも明解なら、「九針十二原」を首篇とする故に『鍼経』とするのも解り易い。若し夫れ『素問』全元起本の首篇は「平人氣象論」ではなかったか。此の篇「黄帝問曰平人何如」の語を以て始まる。按ずるに素の義に平素があり、『漢語大詞典』も「素人」を「平常的人」と解する。全元起、林億以来の『素問』を素を問うとする素を「平人」の意とすれば如何。

現世に在りては願わくは質朴で良く通じる命名として錢先生もご不快無く、泉下に在りては願わくは素を問うという伝統の解に則り「平素問答」の増字解経を退けることを以ての故に桂山先生もご安心されたまわんことを。

合掌

目次

1. 語法とは何か	1
2. 詞の構成	2
[1] 単音詞と複音詞	2
①聯綿詞 ②疊音詞 ③訳音詞 ④附音詞 ⑤複合詞	
[2] 単純詞と合成詞	3
①連合式 ②偏正式 ③述補式 ④動賓式 ⑤主謂式 ⑥重疊式 ⑦綴合式	
3. 実詞と虚詞 —— 詞類について	5
[1] 実詞と虚詞	6
[2] 中医古典と詞類研究の意義	6
4. 名詞	6
[1] 名詞とは何か	6
[2] 名詞の語法的特性	7
5. 動詞	8
[1] 動詞とは何か	8
[2] 動詞の語法的特性	8
6. 形容詞	9
[1] 形容詞とは何か	9
[2] 形容詞の語法的特性	9
7. 数詞と量詞	10
[1] 数詞とは何か、量詞とは何か	10
中国医学古典中の数詞・量詞の特性 古典的数表示法	
[2] 数詞・量詞の語法的特性	11
8. 代詞	12
[1] 代詞とは何か	12
[2] 人称代詞	12
①第1人称代詞 ②第2人称代詞 ③第3人称代詞 ④反身代詞	
[3] 指示代詞	13
①近指代詞 ②遠指代詞 ③傍指代詞 ④虚指代詞 ⑤無指代詞 ⑥特殊指示代詞	
[4] 疑問代詞	13
①誰 ②孰 ③何 ④曷 ⑤奚 ⑥胡 ⑦安 ⑧焉 ⑨惡	
9. 副詞	14
[1] 副詞とは何か	14
[2] 程度副詞	14
①重度を表す ②軽度を表す ③比較を表す	

[3] 範囲副詞	15
①総括範囲を表す ②限定範囲を表す ③共同	
[4] 時間副詞	15
①過去を表す ②現在を表す ③恒常性を表す ④速やかであることを表す ⑤緩慢であることを表す ⑥長時間を表す ⑦短時間を表す ⑧近い未来を表す ⑨最終を表す	
[5] 頻度副詞	16
①動作・行為の反復・連続を表す	
[6] 肯定／否定副詞	16
①肯定を表す ②一般性否定を表す ③禁止性否定を表す	
[7] 語気副詞	16
①反語を表す ②希望を表す ③推測を表す ④驚き・感嘆を表す ⑤譲歩を表す	
[8] 謙敬副詞	16
①謙譲や尊敬の意味を表す	
[9] 指代性副詞	17
①動詞の前に用いて間接的に人称代詞を表す	
10. 介詞	17
[1] 介詞とは何か	17
[2] 常用介詞	17
①時間・場所を表す ②原因・目的を表す ③方式・根拠を表す ④対象を表す ⑤比較を表す ⑥動作・行為の主動者を表す	
11. 連詞	18
[1] 連詞とは何か	18
[2] 並列連詞	18
①対等な関係を表す	
[3] 順承連詞	18
①道理の先後相承を表す ②時間の前後相継を表す	
[4] 進層連詞	19
①ある句子の内容を次の句子でいっそう進展させる	
[5] 選択連詞	19
①別の選択肢を提示する	
[6] 転折連詞	19
①反転 ②他転	
[7] 仮設連詞	19
①仮設条件を示す分句の前に置かれる	
[8] 因果連詞	19
①原因・結果関係を表す	
[9] 目的連詞	20
①目的を表す詞組・分句の前に置かれる	

[10] 讓歩連詞	20
①複句の前分句にあつて仮定または事実の讓歩を表す	
[11] 修飾連詞	20
①状語と中心詞の間にあつて修飾關係を表す ②前後往來上下東西などの詞とともに時間・方位・範圍などを表す	
12. 助詞	20
[1] 結構助詞	20
①定語＋之＋中心語 ②主語＋之＋謂語 ③前置賓語＋之／是＋謂語 ④為＋名詞＋所＋動詞	
[2] 語氣助詞	21
①句首語氣助詞 ②句中語氣助詞 ③句末語氣助詞 ④語氣助詞の連用	
[3] 語綴助詞	22
①前綴助詞 ②後綴助詞	
13. 嘆詞	22
14. 詞組	22
[1] 詞組の構造形式による分類	23
①連合詞組 ②偏正詞組 ③述賓詞組 ④述補詞組 ⑤主謂詞組 ⑥複指詞組 ⑦介賓詞組	
[2] 詞組の語法壞能による分類	23
①名詞性詞組 ②動詞性詞組 ③形容詞性詞組	
[3] 複雑詞組の分析	24
15. 句子	24
[1] 句子成分の分類	25
①主語 ②謂語 ③賓語 ④定語 ⑤状語 ⑥補語	
16. 句子の種類	27
[1] 句子の構造による分類	27
①單句・複句 ②完全句・簡略句 ③無主句・獨詞句	
[2] 句子の内容による分類	27
①陳述句 ②疑問句 ③祈使句 ④感嘆句	
[3] 句子中の謂語の性質による分類	28
①動詞謂語句 ②形容詞謂語句 ③名詞謂語句	
[4] 被動句	29
①為＋主動者＋所＋動詞 ②為＋主動者＋動詞 ③動詞＋於(于)＋主動者 ④見＋動詞＋於(于)＋主動者 ⑤見＋動詞 ⑥非被動句と形式的差異のないもの	
[5] 双賓語句	29
①給与類 ②教示類 ③作為類 ④奪取類 ⑤致使類 ⑥稱謂類 ⑦地位賓語をもつ双賓語句 ⑧數量賓語をもつ双賓語句	

[6] 特殊な動賓句	31	
①対動用法 ②供動用法 ③属性賓語句		
資料について	32	
17. 語序変化	36	
[1] 主謂倒装	36	
①感嘆句 ②疑問句 ③陳述句		
[2] 賓語前置	37	
[3] 定語後置	38	
18. 簡略句	38	
[1] 句子成分の省略	38	
①対話省 ②承前省 ③後蒙省 ④汎指省 ⑤自述省		
[2] 主語の省略	38	
[3] 謂語の省略	39	
[4] 賓語の省略	39	
[5] 定語の省略	39	
[6] 介賓詞組の介詞の省略	40	
[7] 仮設条件を表す偏句などの省略	40	
19. 複句	40	
[1] 連合複句	40	
①並列複句 ②対比複句 ③選択複句 ④補充複句 ⑤記述複句 ⑥按断複句		
[2] 偏正複句	41	
①因果複句 ②転折複句 ③譲歩複句 ④進層複句 ⑤仮設複句		
[3] 多重複句	43	
[4] 緊縮複句	44	
常用固定格式集	44	
[1] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>所 + α</td></tr></table> 式	所 + α	44
所 + α		
[2] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>以 + α</td></tr></table> 式	以 + α	46
以 + α		
[3] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>何 + α</td></tr></table> 式	何 + α	48
何 + α		
[4] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>如 + α</td></tr></table> 式	如 + α	50
如 + α		
[5] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>然 + α</td></tr></table> 式	然 + α	50
然 + α		
[6] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>若 + α</td></tr></table> 式	若 + α	52
若 + α		
[7] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>不(非、無) + α</td></tr></table> 式	不(非、無) + α	54
不(非、無) + α		
[8] <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td>方 + α</td></tr></table> 式	方 + α	55
方 + α		
[9] その他	55	
「然後、厥氣在下」について	57	

1. 語法とは何か

どの言語にも多くの素材単位があり、一定の規則によって組織され、運用される。語法・文法というのはその規則の抽象的な体系である。ヨーロッパの伝統文法では形態論に統辞論を加えた2部門を指してギリシア語で「グラマティケー（文字の術）」と呼んでいた。これは古文を解釈し、正しい文章を書くためのもので、いわば言葉の規範として記述される文法であった。中国ではこのような語法の学は訓詁・修辞の学の中に埋もれていたが、近代以後、西洋文法の影響の下に中国語の語法学の研究が始まった。

中国語の語法は言語の素材単位である「詞（単語）」の構造・変化・分類を扱う「詞法」と話し手から聞き手へのメッセージの単位である「句子（文）」の構成規則を扱う「句法」に分けられる。前者は語論であり、後者は統辞論に当たると言われる。

ヒトの言語は二つの次元、すなわち話し手から聞き手への発語行為という行動としての言語の次元と、誰が話し手になり、また聞き手になろうともそれが理解されるために必要な共通の知識としての言語というもう一つの次元において成立している。「詞法」の扱う詞とは知識としての言語の単位であり、「句法」の扱う句子は行動としての言語の単位であると言えよう。同じ発語内容が次元によって詞法・句法の両方によって扱われ、

「子知医之道乎」（『素問』・著至教論）

「あなたは医学の道理を知っているか」という一つのメッセージを伝えるこの6字はそれぞれが一つの詞であり、それぞれの詞の性格を扱うのが詞法である。またこの6字が全体で一つの句子を構成しており、句子の構成成分、すなわち「句子成分」としての性格を扱を扱うのが句法である。

「帝曰“善”」（『素問』・移精变氣論など）

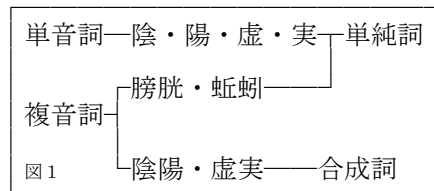
この「善」は明らかに一つの発語内容の全体を表わしている。このような「独詞句」では行動言語と知識言語の二つの次元の単位が同じになる。

2. 詞の構成

語法研究に必要な基本的単位の一つである「詞」は「一般に一定の意味を持つ、最小の独立して運用される単位である」と定義される。しかしさらに詞を構成すべき言語要素として「語素」（詞素・形態素とも言う）という単位が考えられ、「同一のあるいは類似した意味を持つ、それ以上分割できない言語要素」とされる。例えば「陰陽」、「虚実」等は「陰」・「陽」、「虚」・「実」等の二つの語素に分割される。

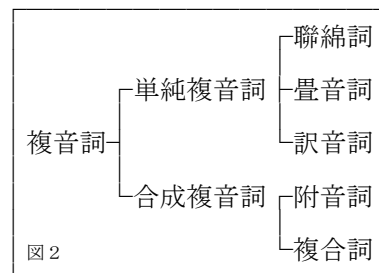
中国語の語素は大多数が1音節であり、漢字1字で書き表される。特に上古漢語においては大多数の単音節語素はまた独立した詞として運用されるので字と語素と詞が形式上完全に一致して見られるのだが、往々にして前例のような複数語素からなる詞もあり、また「膀胱」・「蚯蚓」等は1語素であるが複音節からなる。

詞は外面的な音節構成から単音詞と複音詞に分けられ、また内部的な意味構造から単純詞と合成詞に分けられる（図1）。



[1] 単音詞と複音詞

「問」・「曰」・「子」・「養」のように1音節からなる詞を単音詞といい、これに対して「黄帝」・「万民」・「百姓」・「租税」のように複数音節からなる詞を複音詞という。複音詞は2音節の双音詞と「黄帝内经」のような3音節以上の多音詞に分けられる。古漢語の複音詞はさらに聯綿詞・疊音詞・訳音詞等の単純複音詞と附音詞・複合詞などの合成複音詞に大別される（図2）。



- ① **聯綿詞** 「連語」とも称される。2字の声母を同じくする双声聯綿詞（恬憺、恍惚、彷彿、凜冽など）と、2字の韻母を同じくする疊韻聯綿詞（栝樓、逡巡、従容、崑崙など）、さらに音声的な結合がなくても2字の結合が緊密で2字を離すと意味が変わってしまうもの（琅玕、霍乱など）がある。

- ② **畳音詞** 「重言」とも称される。同一の2字を反復するもので反復の結果1字の時と別の意味を生ずる単純畳音詞（洒洒、堂堂など）と原義を強調する合成畳音詞（渾渾、膨膨など）に分けて考えられる。後者にはさらに複数の意味を付加するもの（人人、家家など）がある。
- ③ **訳音詞** 外国語の音訳に漢字を用いたもの。「单于」（王の匈奴語）、「耶馬台」（日本語地名）、「耆婆」（サンスクリット語人名）、「沙児某乞」（蔓青のモンゴル語）など。
- ④ **附音詞** ある詞の前に詞頭（阿ーなど）または後に詞尾（ー然など）を付加して作られる合成複音詞。「神乎」「妙乎」「卒然」など。
- ⑤ **複合詞** 意味が類似する複数字を合わせた同義複合詞（根本、神靈、把握、虚無など）、意味が相反する複数字を合わせた反義複合詞（呼吸、存亡、虚实、陰陽、左右、正邪など）、それ以外の複数字を合わせたもの（將軍、養生、邪氣、天寿、深淵、王不留行など）に分けられる。反義複合詞には「国家」「緩急」のように相対する2字の一方の意味のみを存する用法があり「偏義複詞」と呼ばれる。「知死生之期」の「死生」、「毒藥治其内」の「毒藥」はこれに当たる（いずれも『素問』より）。

[2] 単純詞と合成詞

詞を内部的な意味から分けると単一の語素からなる単純詞と複数語素からなる合成詞に分けることができる。単純詞には「余」「聞」「人」「皆」のような単音節語素からなるものと「膀胱」「蚯蚓」などのように複音節語素からなるものがある。合成詞は語素と語素の関係形式から次のように分類される。

① 連合式

語素と語素が主次をつけられない並列関係にあるもの。

時世 動作 春秋 虚無 精神 平均 把握 肌肉 思想 形体 分別 合同
調合 清浄 閉塞 絶滅 賊邪 鍼石 綱紀 音声 変化 津液 軟弱 分裂
解剖 閉塞 堅固 端正 動揺 潤沢 慄悍 分離 源泉

② 偏正式

前の語素が後の語素を修飾するもの。

聖人 独立 不肖 地理 経脈 孫絡 良工 人事 人情 平気 条理 少陰
太陽 上焦 三焦 中指 督脈 帶脈 乳房 病因 苛疾 大豆

③ 述補式

後の語素が前の語素を補充する関係にあるもの。

傷寒 傷暑 傷食 中風 保全 (錢超塵『内経語言研究』1990-はこれを偏正式に含めるが許敬生『医古文語法知識』1991-に従った。)

④ 動賓式

動詞性の語素の後に名詞性の語素が結合したもの。賓語は句法で動詞に続く名詞。補充関係よりも強い支配関係を言う。「読書」「注意」などは「書を読む」「意を注ぐ」という動賓式である。

臨泣 承泣 承漿 至陽 至陰 迎香 戴眼 戴陽 將軍 養生 得氣 補氣
補血 補腎 益肺 驅虫 扶正 ・邪 ・痰 利湿 攻下 治病 降逆 固精
清熱 煉丹 拔鍼 折鍼 置鍼 刺絡 瀉血 按脈 服藥

しかし穴名、病名、官職などを除くと古漢語では「詞(熟語)」としての結合は始めは弱く、用いられる間に術語として定着したものである。

⑤ 主謂式

名詞性の語素の後に動詞性または形容詞性の語素が結合したもので、それぞれ句法の主語と謂語(述語)に該当する。

人迎 三陰交 腹哀 腹結 睛明 神明 神昏 面塵 面垢 舌強 舌卷
肝鬱 頭痛 頭重 半身不隨 瞳神縮小 真人活命飲 王不留行

⑥ 重疊式

複音詞の疊音詞に相当する、同一の単音單純詞を反復するもので、中医古典にはきわめて多くの例がみられる。

喘喘 溶溶 潰潰 洒洒 渾渾 綿綿 累累 冥冥 介介 濯濯 忽忽 膨膨
漉漉 窈窈 悒悒 几几 嗇嗇 翕翕 鬱鬱 回回 洗洗 連連

⑦ 綴合式

複音詞の附音詞に相当する、語素と語綴からなる合成詞で、語素の前にある語綴を詞頭、後にある語綴を詞尾と称する。「一然」という語綴を詞尾に持つ形が多く見られる。

蒼蒼然 循循然 默默然 几几然 渾渾然 累累然 淡淡然 徐徐然 洒然
怯然 昭然 慧然 泚然 快然

鍵詞⇒字・詞・語素、単音詞・複音詞、単純詞・合成詞・同義複詞・反義複詞・偏義複詞、連合式・偏正式・動賓式・主謂式
 演習⇒知っている熟語から同義複詞・反義複詞を見つける。また連合式・偏正式・動賓式・主謂式を見つける。

中古漢語三十六声母の音韻構造

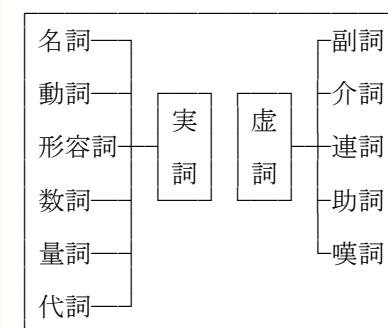
古分類	現代分類	英名	調音点	調音体	調音法
牙音	軟口蓋音	velars	後舌面	軟口蓋	破裂音
舌頭音	歯音	dentals	舌尖	上歯	破裂音
舌上音	そり舌音	retroflex	舌尖	硬口蓋前部	破裂音
重唇音	両唇音	bilabials	上唇／下唇		破裂音
軽唇音	唇歯音	labiodentals	下唇	上歯	摩擦音
歯頭音	歯音	dentals	舌尖	上歯	破擦音 摩擦音
正歯音	舌面音	dorsals	舌端	硬口蓋	破擦音 摩擦音
喉音	声門音	glottals	声門／口蓋垂		破裂音 摩擦音
全清	無声無気音	次濁	鼻音	鼻腔に呼気が流れ出る音	
次清	無声有気音		流音	側面音 (l) と振動音 (r)	
全濁	有声音		半母音	調音点の狭い有聲摩擦音	

3. 実詞と虚詞 —— 詞類について

前節では詞を音節構造および意味構造から分類する方法を学んだが、さらに詞は語法上の性質によっても分類される。

[1] 実詞と虚詞

訓詁考証学の伝統的用語「実字・虚字」に由来する「実詞・虚詞」の分類は近代語法学史においても一貫した基準があったとは言い難いが現代では通常次のように考えられている。



「実詞」は単独で句詞成分（文の構成単位）となり、また問題の解答となるもので、比較的実在

的な意義を有し、客観的事物およびその動作、行為、存在、変化、性質、状態、数量、時間、場所などの概念を表示する。実詞は名詞、動詞、形容詞、数詞、量詞、および代詞を包括する。

「虚詞」は副詞を除いて句詞成分となりえず、単独で問題の解答とならないもので、実在の意義を表示しない。基本的には語法関係あるいは語気を表示するもので、副詞、介詞、連詞、助詞、嘆詞を包括する。

[2] 中医古典と詞類研究の意義

代表的な清朝考証学者の一人である王引之は「経伝中（儒学の古典解釈において）実字は訓み易く、虚詞は積き難い」として『経伝釈詞』（1793年序）を著した。実詞と虚詞に共通の字が用いられるとき、実詞として読んでいる字が実際は虚詞であったために意味が通じがなくなっているものが多かったのである。

「余子萬民、養百姓……余哀其不給（終）、而屬有疾病」——九針十二原

前後二つの「余」に続く「子」「養」、「哀」「屬」はいずれも動詞で類義（育てる、哀れむ）、「其」「有」をいずれも代詞（その）である、と詞類を判明することではじめて文意が明かとなる。

4. 名詞

[1] 名詞とは何か

「名詞」とは人物・事物の名称、および時間・場所・方位を表す詞をいう。中国語

の語法では数の概念を表すものは「数詞」、また事物を数える単位の名称や動作の回数を表す詞は「量詞」として名詞と別に扱う。

人物・事物・場所などには人名、地名などの「専有名詞（本名、固有名詞）」と普遍的名称としての「公共名詞（普通名詞）」がある。

人物	：黄帝、岐伯（専有名詞）	；	聖人、女子（公共名詞）	
事物	：河、江（上古は専有名詞）	；	鍼、任脈（公共名詞）	
時間	：春、今日、平旦（時点）	；	春三月、萬歳（時段—期間）	—時間詞
場所	：房、庭、明堂（地点）	；	三寸、三里（地段—距離）	—地位詞
方位	：上、中、下、内、外、表、裏、東、西、南、北			—方位詞

[2] 名詞の語法的特性

① 形容詞・数詞・代詞の修飾を受け、時に偏正式の合成詞を作る。ただし専有名詞は一般に形容詞・数詞に直接修飾されない。

黄帝（形容詞＋名詞）、萬民（数詞＋名詞）、其俗（代詞＋名詞）

② 句子の中で主語（句頭）・賓語（動詞後）・定語（名詞前）となる。

肝（主語）藏（動詞）血（賓語）。天地（定語）之道（名詞）

③ 「AはBである」というような判断を表す句子において謂語（述語）となるもので現代中国語では「是」（～である）に続く。

明堂者、鼻也。（明堂とは鼻である）

④ 時間、場所、方位を表す名詞は動詞の補語（意味を補う成分）となる。

一下（動詞）膝三寸（場所）、二三歳（時間）不已（動詞）

⑤ 句子の中で状語（動詞を修飾する成分）となる。

比喻 ：氷釋、師事

参照 ：弗治、滿十日、法當死（玉機真藏論）

工具・方式 ：可湯熨及火灸（玉機真藏論）

場所 ：其陵居而多風（異方法宜論）、陰居以避暑（移精變氣論）

方位 ：胃氣上注于肺（口問）

時間 ：夏刺冬分…時欲怒（診要經終論）、病旦已矣（熱論）

5. 動詞

[1] 動詞とは何か

「動詞」とは動作・行為、存在・変化、心理活動を表す詞、および能願動詞、判断詞をいう。「能願動詞」は動詞・形容詞の前に置かれて可能・義務・必要・願望などを表すもので、「助動詞」とも呼ばれた。「判断詞」は判断句の主語と謂語の関係を表すもので「繫詞」ともいう。能願動詞と判断詞を動詞の付類とする。

動作・行為：問、答、迎、随、出、入、往、来、終、始

存在・変化：生、死、有、無、存、亡

心理活動：怒、喜、思、憂、恐

能願動詞：能、可、応、当、須、願、欲

判断詞：是、爲

[2] 動詞の語法的特性

① 形容詞・副詞・数詞の修飾を受けられる。

大怒（形容詞＋動詞）、数欠（副詞＋動詞）、五刺（数詞＋動詞）

② 句子の中で謂語（述語）となる。

帝（名／主）曰（動／謂）、余（名／主）聞（動／謂）

③ 句子の中で動詞を修飾する状語となる。

血氣（主語）揚（状語）溢（謂語）。 ——『素問』八正神明論

委中（主語）者、屈（状語）而取（謂語）之。 ——『靈樞』邪氣藏府病形

悲以恐。棄衣而走、登高而歌。（賓語を従えている） ——『素問』陽明脈解

④ 句子の中で名詞を修飾する定語となる。

至人、昇龍、伏虎、走狗

⑤ 名詞として用いられ、主語や賓語になることがある。

刺之道、必通十二經絡之所終始。 ——『靈樞』本輸

陰陽以通、其臥立至。 ——『靈樞』邪客

⑥ 能願動詞は動詞の前に置かれる。

氣化則能出矣。 ——『素問』靈蘭秘典論

願聞其解。 ——『靈樞』本輸

- ⑦ 判断詞「爲」は「属する」の意味を包含する。

水爲陰、火爲陽。 ——『素問』陰陽応象大論

6. 形容詞

[1] 形容詞とは何か

「形容詞」とは人や事物の形状・性質、または行為・動作および発展・変化などの状態を表す詞をいう。

形状：長、短、大、小、高、低、方、円、曲、直、白、黒

性質：正、邪、老、若、虚、実、寒、熱、堅、軟、酸、苦

状態：遅、速、滑、渋、昏昏、堂堂、卒然

[2] 形容詞の語法的特性

- ① 副詞（主として程度副詞、否定副詞）の修飾を受ける。

最貴（程度副詞＋形容詞）、不明（否定副詞＋形容詞）

- ② 句子の中で謂語、定語、状語、また時として補語となる。

其理奥、其趣深。（謂語）

大風、苛毒、清陽、濁陰、長鍼、大鍼（定語）

卒然而止。易陳而難入。（状語）

氣來實強、氣來虚弱。（補語）

- ③ 疊音変化、付音変化をする。

無刺渾渾之脈（疊音変化）卒然、妙乎（付音変化）

- ④ 動詞として用いられ、賓語を従えることがある。

以辛潤之、以苦堅之。

- ⑤ 名詞として用いられ、主語や賓語になることがある。

虚實不同。（主語）病有久新。（賓語）

鍵詞⇒詞類、実詞・虚詞、名詞、時間詞、地位詞、方位詞、動詞、能願動詞、判断詞、形容詞
課題⇒『靈枢』経脈第十（資料集52～77頁）から名詞、動詞、形容詞を選び出し、その分類と語法的特性を考える。

（例）名詞：雷公、黄帝（專有名詞）；経脈、始、度量（公共名詞）

動詞：問、曰（動作・行為）；生、成（存在・変化）；言、刺（名詞として用いられる）；願（能願動詞）；爲（判断詞）

7. 数詞と量詞

[1] 数詞とは何か、量詞とは何か

甲骨文の時代から、単位や回数を表す「量詞」は数を表す「数詞」と必ず連用され、単独で使用されることがないため、語法学書では同一項で論じられる。

数詞には整数、分数、倍数などの「数目」と物の順序を表す「序数」がある。

量詞には物の分量・数量などの単位を表す「物量詞」と動作の単位を表す「動量詞」がある。

数詞	数目	: 二十
	序数	: 第一
量詞	物量詞	: 寸
	動量詞	: 壯

中国医学古典中の数詞・量詞の特性

- ① 中国医学古典特有の量詞：壯・瘡・息
- ② 相乗数：二八（十六歳）、三八（二十四歳）
- ③ 虚数：三・九・十・百・千・万（三・九の倍数：三十六・七十二等）

三而成天、三而成地、三而成人、三而三之、合則爲九。——六節藏象論ほか

天以六六爲節、地以九九成會。——六節藏象論

風者百病之長也。——玉機真藏論

これらは理念的、思弁的な数字であって、実験的観測の結果から出たものではないという意味で虚数と呼ばれる。

古典的数表示法

- ① 序数：第一鍼、八日長鍼、此治之四失也、正月太陽寅、孟春痺
- ② 倍数：倍之、十之

③ 分数：分母数＋分＋量詞／名詞＋之＋分子数

一寸四分分之一（1寸 $1/4$ 分）
九寸八分分之七（9寸 $7/8$ 分）

最初の「分」は分数を表す分、
次の「分」は量詞（ $1/10$ 寸）

十分身之六（全身の $6/10$ ） 十分＋名詞「身」＋六

十分蔵之八（全蔵の $8/10$ ） 十分＋名詞「蔵」＋八

分母数＋有＋分子数

病死者十有三也。（歳露論） 大病死者十有六。（同）

[2] 数詞・量詞の語法的特性

① 数詞＋量詞＋名詞 数量詞組が名詞の定語となるもの。

一卷書（華佗伝）、一簞食一瓢飲（論語）、一杯水…一車薪（孟子）

漢代以前は使用例がまれで、医書にはほとんど見えない。

② 名詞＋数詞＋量詞 数量詞組が名詞の補語となるもの。

長三寸六分、圍二尺六寸、廣一尺三寸、桂心一斤

比較的多い用例。

③ 動詞＋数詞＋量詞 数量詞組が動詞の補語となるもの。

度百歳、刺三瘡、留二呼

②と共に比較的多い用例が見られる。

④ 「九死一生」、「百戦百勝」のように動量詞を用いない場合が多い。

脈再動、三刺而已、今見三死不見一生（評熱病論）

状語、動詞を直接修飾する。

⑤ 物量詞を用いない例も多い（①が少ない理由か）。

三陰、三陽、四時、五臟、五味、九鍼、二十五變、百病

定語、名詞を直接修飾する。

⑥ 「再」は動詞の前に置かれて「2回、2回目」を意味する数詞。

平人日再後（平人絶穀）。 2回

再問（脹論）。 2回目に

数詞・量詞は主に定語、状語、補語として用いられるが、主語、賓語、謂語となる場合もある。

主語 形式上、ある句の始めにおかれる名詞、代詞、数詞

二日圓鍼。

賓語 ある句の動詞／介詞の後におかれる名詞、代詞、数詞

聞一知十。肺消者、飲一溲二（気厥論）。

謂語 ある句の中心となる叙述部分におかれる動詞、形容詞など

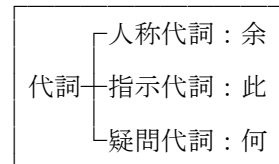
脈之状不一、載於『脈經』者二十四。（劉完素）

8. 代詞

[1] 代詞とは何か

中国語では代詞は名詞・動詞・形容詞・数詞・量詞・詞組・句子などの包括する概念を代用し、また対象との関係を指示するはたらきがあり、一般に名詞だけを代用する外国語の代名詞と異なる。「物」という詞は個々の抽象概念や具体的存在の概念を「代用する」が代詞とは呼ばれない。それが代詞「其」「此」などと異なり、発語者と対象の関係を指示する要素を持たないことから代詞は一種の「関係詞」でもある。

代詞は表す対象がこれまでの名詞、動詞、形容詞、数詞、量詞などのように直接でないため、「どの対象を代用しているか？」の判断がしばしば古典テキスト解釈の鍵となることすらある。



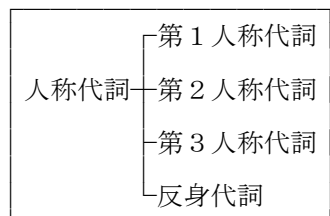
以下、一般的な代詞分類に従って述べる。

[2] 人称代詞

さらに第1人称代詞（自称代詞）、第2人称代詞（対称代詞）、第3人称代詞（他称代詞）、反身代詞の4種に分けられる。

① 第1人称代詞

『素問』、『靈樞』の中では「余」が大多数でわずかに「吾」「我」が用いられ、語法的には主語定語、賓語などにされる。先秦時代には「吾」が主語、定語に「我」が賓語に用いられることが多かった。



② 第2人称代詞

同じく「汝」、「若」。古くは「乃」、「而」は定語のみで賓語にされなかった。「汝」、「爾」は親しい呼びかけの呼称で目上に用いるべきではなかった。

③ 第3人称代詞

同じく「其」、「之」。上古には第3人称代詞の専用語は存在せず、「其」、「之」、「彼」などが指示代詞から転用された。「之」は常に賓語、「其」は常に定語。

④ 反身代詞

「自」、「己」など自身を呼称する語。

そのほかに人称代詞には単数、複数の区別がない、敬称がある、人称を変える、人と物の区別がないなどの特徴がある。

[3] 指示代詞

① 近指代詞：「是」、「此」、「之」、「然」、「斯」、「若」など。

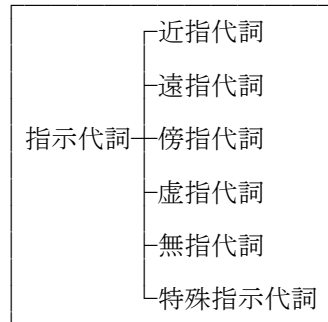
② 遠指代詞：「彼」、「夫」、「其」など。

③ 傍指代詞：「他」、「異」（異日）など。

④ 虚指代詞：「或」、「有」、「某」のように特定できない「ある者」を指す。

⑤ 無指代詞：「莫」、「無」など具体的なものを示さず、否定副詞「不」、「非」の前などで用いられる。

⑥ 特殊指示代詞：動詞／形容詞／詞組＋「者」、「所」＋動詞
往者、來者、堅者、知其要者；所宜、所爲、所出、所不能全



[4] 疑問代詞

① 誰（人）：主語、賓語、定語、謂語／誰能別之。不知其誰。

② 孰（人、物）：多く主語／孰知其要。孰少孰多。

③ 何（物、故）：賓語、状語、定語／何謂形。皆愈何也。是爲何病。

④ 曷（物、時、故）：状語、定語／曷益、曷損。曷月歸哉。曷爲言王。

⑤ 奚（物、処、故）：賓語、定語／且奚適也。此奚疾哉。

- ⑥ 胡 (何+故) : 状語／胡爲於泥中。
- ⑦ 安 (処) : 賓語／病安從來。其病安在。
- ⑧ 焉 (処) : 状語／人焉受氣。陰陽焉會。
- ⑨ 惡 (物、処、故) : 状語／惡可以度量刺乎。

鍵詞⇒数詞、相乗数、虚数、除数、倍数、分数、量詞、物量詞、動量詞、代詞、人称代詞、指示代詞、疑問代詞

演習⇒『靈枢』骨度、腸胃の数詞、量詞を語法的に調べる。

『靈枢』経脈の代詞を語法的に調べる。

(例) 重十兩：十／数詞、整数 兩／量詞、物量詞

所行：所／特殊指示代詞 其：遠指代詞

9. 副詞

[1] 副詞とは何か

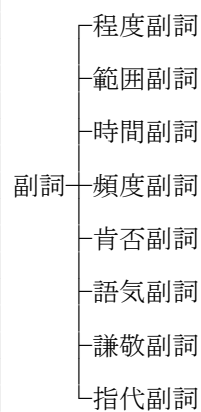
副詞は一般には名詞、動詞、形容詞、他の副詞などの謂語を修飾し動作・行為・性質・状態などの程度・範囲・時間・

否定／肯定・語気などの語法的意義を表す。個別的には

「凡」「唯」のように主語を修飾する場合もある。

句子成分となること、また否定副詞のように単独で発語されるものもあることから、半実詞的な性格があるとされる。

ここでは『医古文語法知識』にしたがって副詞を右図のような8種に分類して述べる。



[2] 程度副詞

- ① 重度を表す：太、最、極、甚、殊

悲哀太甚。何藏最貴。手少陰脈動甚者、妊子也。殊貴。

- ② 軽度を表す：少、略、頗

一劑而嘔少止。願略聞其意。髮頗斑白。

- ③ 比較を表す：更、愈、益、尤

病益甚。小腹尤堅。

[3] 範圍副詞

- ① 総括範囲を表す：皆、悉（卒）、咸、盡、凡
六府皆爲陽。萬物悉備。願卒聞經脈之始生。鍼道咸絶。萬物盡然。凡刺之法、必先本于神。
- ② 限定範囲を表す：唯（惟・維）、獨、但、直
唯聖人從之。腎氣獨沈。但弦、無胃曰「死」。直入掌中。
- ③ 共同、相互、交代を表す：俱、共、同、更、相
天地俱生。正邪共會也。同出而名異耳。虛實更作。寒暖相移。

[4] 時間副詞

- ① 過去を表す：既、已、曾、嘗
人血既盡。年已老而有子。未曾不惑。未嘗被傷。
- ② 現在を表す：方、始、乃
肌肉方長。血氣始盛。度百歲乃去。
- ③ 恒常性を表す：素、常
皆非其素所能也。診法常以平旦。
- ④ 速やかであることを表す：立、亟、卒、即、乍、疾
病立已。亟刺陰陽。或卒死、或病久。脈乍緊。君馬行疾。
- ⑤ 緩慢であることを表す：徐、漸、稍
疾出鍼、而徐按之。邪氣稍至。
- ⑥ 長時間を表す：久、良久
久立傷骨。良久乃得視。
- ⑦ 短時間を表す：須臾、少頃、有頃、斯須
須臾吐出三升許蟲。老者有頃已。相對斯須。
- ⑧ 近い未来を表す：將、且、欲
精神將奪矣。陽氣且出。欲竭其精。
- ⑨ 最終を表す：卒、終、竟
卒至于死。終如其言。十年竟死。

[5] 頻度副詞

- ① 動作・行為の反復・連続を表す：復、更、數

終而復始。復動、更呼佗。數問其情。

[6] 肯定／否定副詞

- ① 肯定を表す：必、固

必先問其病之所先發者。右脈固當沈緊。

- ② 一般性否定を表す：不、未、非、弗、莫

其來、不可逢。未觀其疾惡、知其原。此非一日之教也。弗能害也。莫貴於人。

- ③ 禁止性否定を表す：莫、勿、無、毋

色脈不順莫鍼。已醉勿刺。奪血者無汗。毋逆天時。

[7] 語気副詞

- ① 反語を表す：豈、寧、其（そもそも～であろうか？）

豈有此理。寧不愉快。身非木石、其能久乎。

- ② 希望を表す：幸、唯（惟）、其（～と願いたい）

幸勿推辭。唯好生者、略察之。其勿忽于是焉。

- ③ 推測を表す：殆、其、庶、庶幾、蓋（おそらく）

殆積血也。其唯聖人乎。庶可以見病知源。吾王庶幾無疾病與。此蓋益其壽命而強者也。

- ④ 驚き・感嘆を表す：曾、竟、乃、其（思いもよらず）

曾不留神醫藥。竟不知孰可摘而孰可遺。乃至如此。何其多也。

- ⑤ 讓歩を表す：尚、且、其（～でさえ）

雖近衣絮、猶尚苛也。死且不避。天其弗識、人胡能覺。

次の句にはそれぞれことなる「其」が現れる。

知音其難哉、音實難知、知實難逢、逢其知音、千載其一乎。

[8] 謙敬副詞

- ① 謙讓や尊敬の意味を表す：請、敢、伏、敬、謹

請問其故。敢問九鍼焉生。臣伏讀。扁鵲曰「敬諾」。善爲脈者、謹察五藏六府。

[9] 指代性副詞

① 動詞の前に用いて間接的に人称代詞を表す：相（1・2・3人称）、見（1人称）

相成之徳、謂孰非後進之吾師云。（1人称）

然君壽、亦不過十年、病不能相殺也。（2人称）

相對斯須、便處湯藥。（3人称）

生孩六月、慈父見背。（1人称）

冀君實或見恕也。（1人称）

※参考【見】⑦動詞の前に用いて自分にどうしてほしいかを表す。；敬語の語感。「見諒」諒察されたい。「見教」教えを請うときの常套語。（香坂順一編『現代中国語辞典』光生館）

10. 介詞

[1] 介詞とは何か

名詞・代詞、あるいは各種の詞組を動詞・形容詞に「紹介」し、時間・場所・原因・目的・方式・根拠・対象・比較などを表す詞を介詞という。「為」「從」など動詞となるものもあり、多くはもと動詞から転じた。介詞と結びつく成分を賓語といい、介詞は賓語の前にあるのが普通だが、賓語が疑問代詞のときなどは介詞が後になる介賓倒置が生じることがある。また「與」「以」「為」などの介詞は賓語が省略されることがある。「於」「以」などの介詞は省略されることもある。

[2] 常用介詞

① 時間・場所を表す：以、於（于）、乎、諸

以平旦死。東風生於春。肺受氣於腎。

② 原因・目的を表す：以、為、因、乎

鼻為之不利。因志而存變、謂之「思」。病乎實也、而以爲虛。

③ 方式・根拠を表す：以、因

人以水穀爲本。上部以何候之。月事以時下。能因陰察陽。

④ 対象を表す：於（于）、為、與

乞藥於牛醫。脾病、不能爲胃行其津液。君之病、與之同。

⑤ 比較を表す：於（于）

莫貴於人。人莫貴於生。

⑥ 動作・行為の主動者を表す：於（于）、為

冬傷於寒。先即制人、後即爲人所制。

※介賓倒置、賓語省略の例

何以知人之且病也。精神内守、病安從來。他山之石、可以之攻玉。

鍵詞⇒程度副詞、範圍副詞、時間副詞、頻度副詞、肯定／否定副詞、語氣副詞、謙敬副詞、指代性副詞、介詞、介賓倒置、賓語省略

演習⇒『素問』宝命全形論の副詞・介詞を語法的に調べる。

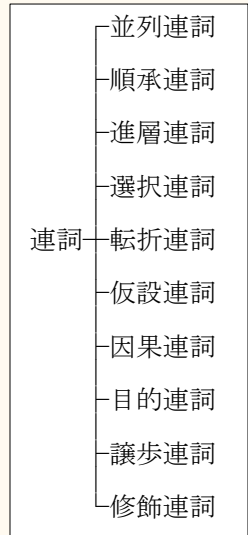
(例) 悉：範圍副詞 莫：否定副詞 以：原因を表す介詞

11. 連詞

[1] 連詞とは何か

連詞は詞、詞組、あるいは句子を接続してそれら相互の關係を表示する語法機能をもつ。介詞と合わせて「關係詞」と呼ばれることもあるが、連詞の後に置かれる成分は賓語ではなく、また否定副詞など他の詞が連詞とともに用いられることはない。

連詞によって接続される各部分の關係によって、右図のような10種に分類されている。



[2] 並列連詞

① 対等な關係を表す：與、及、而、以

大指與中指相屈、如環。病至則惡人與火。

眼中赤痛及瞼目閏動。肩臂不得屈伸而痛。脈弱以滑、是有胃氣。

[3] 順承連詞

① 道理の先後相承を表す：以、而、則、即

天有四時五行、以生長收藏。屈肘而得之。近之則痛劇。

禁不可鍼、鍼即發狂。

② 時間の前後相繼を表す：以、而、則、即

有未至而至、有至而不至。

[4] 進層連詞

① ある句子の内容を次の句子でいっそう進展させる：況

此五者各有所傷、況於人乎。

[5] 選択連詞

① 別の選択肢を提示する：或、將、其

或手足諸穴、皆縦横寸用之。材力盡耶、將天數然也。

其信然邪、其夢邪。

[6] 転折連詞

① 反転（ところが）：而、然

孔穴者爲鍼刺灸療之場、而形有長短、體有肥瘦。

灸亦得、然不及鍼。

② 他転（ところで）：若夫

此天之高、地之廣也、非人力之所能度量而至也。若夫八尺之士、皮肉在此、

外可度量切循而得之、其死可解剖而視之。

[7] 仮設連詞

① 仮設条件を示す分句の前に置かれる：若、如

若頻灸、即抜氣、上令人目不明。

如頭頂穴、若灸多、令人失精神。

[8] 因果連詞

① 原因・結果関係を表す：故、是以、是故

月事以時下、故有子。有餘則耳目聰明、身體輕強、老者復壯、壯者益治、是

以聖人爲無爲之事。道者聖人行之（…）是故聖人不治已病。

[9] 目的連詞

- ① 目的を表す詞組・分句の前に置かれる：以
咽以嚥物、喉以候氣。被髮緩形、以使志生。

[10] 讓歩連詞

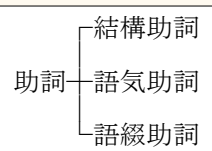
- ① 複句の前分句にあつて仮定または事実の讓歩を表す：雖
鳩尾雖是胸腹之穴、灸不過七七壯。

[11] 修飾連詞

- ① 状語と中心詞の間にあつて修飾関係を表す：而、以
寒氣入經…故卒然而痛。四支不得稟水穀氣、日以益衰。
- ② 前後往来上下東西などの詞とともに時間・方位・範圍などを表す：以、而、已
下此以往、未之聞也。人年五十已上爲老、二十已上爲壯。

12. 助詞

句子の中で補助的な作用を行うので助詞といい、単独で用いられることはなく句子成分とされない。他の詞、詞組、あるいは句子について何らかの結構（語法的連結）関係を表示する結構助詞、語気を表示する語気助詞、および詞頭・詞尾となる語綴助詞がある。



[1] 結構助詞

名詞性詞組やさまざまな分句を組成したり、あるいは句子の詞序（語順）に変化を発生させる語法的結構関係を表す。之・底・是・所・者等がある。

① 定語＋之＋中心語

寸口之脈、芳草之氣、身之肌肉、百病之長（所属関係の名詞性詞組）
少壯之人、渾渾之脈、方刺之時、調氣之方（修飾関係 " "）
人之耳中鳴者、奇邪之走空竅者（詞序変化：定語後置）

② 主語＋之＋謂語（分句）

夫氣之在脈也、邪氣在上。願聞邪氣之在經也。何以知懷子之且生也。

③ 前置賓語＋之／是＋謂語（詞序変化：賓語前置）

虛實之難辨、惟名利是務

④ 為＋名詞＋所＋動詞（動詞が被動式であることを表示）

爲世人所欽重。術怒、攻布、爲布所破。

※「皆得所願。若所愛在外。天地所以生萬物。」などの所＋動詞／介詞の用例に見る所を名詞性詞組を発生させる助詞とする説もある。

[2] 語気助詞

① 句首語気助詞（発語詞ともいい、発語の語気を表す）：夫、蓋

夫善用鍼者、取疾也、猶拔刺也。

蓋天下之病、變態雖多、其本則一。

② 句中語気助詞（句中の語調を調える）：者、之、也、其

陰陽者、天地之道也。久之、鼻忽有聲。其死也靜。脈其四時動奈何。

③ 句末語気助詞：次の4種に分ける

a. 陳述語気：也、矣、焉、耳

神氣之所遊行出入也（判断）。九針畢矣（已然）。精神將奪矣（将然）。如此則治其經焉（指示）。亦唯鍼焉（詠嘆）。無子耳（終了）。

b. 疑問語気：歟、乎、耶、焉、哉

天之罪歟、人之過乎。時世異耶。（詢問）

其可妄言哉。孰能窮其道焉。（反詰）

c. 祈使語気：矣、焉、而、也

子行矣。其勿忽于是焉。（命令）

已而、已而。（勸誡）無憂也。（勸慰）

d. 感嘆語気：哉、乎、矣、歟

善哉。神乎。甚矣。

④ 語気助詞の連用：最後のものに重点が置かれる。

迎而奪之而已矣。神之妙也哉。

[3] 語綴助詞

- ① 前綴助詞：有（有夏）、阿（阿母）、老（老李）
- ② 後綴助詞：子（君子、女子、瞳子）、然（卒然、渾然）

※『医古文語法知識』ではこれらを詞類としない。

13. 嘆詞

嘆詞は句子から独立して用いられ、他の詞と結構関係を生じることのない特殊な詞で、悲傷、感慨、驚嘆、歡喜等の感情を表す。感嘆の声を模した象声詞（擬音語）に類似するが、象声詞は他の詞と連結して句子成分となることに相違が見られる。また嗚呼と乎、嗟乎と哉など、嘆詞から語気詞への発展・変化がたどられる場合もある。

嗚呼、可哀也已。（悲傷）

嗟乎、燕雀安知鴻鵠之志。（感慨）

噫嘻、亦太甚矣先生之言也。（驚嘆）

※象声詞の例：帝用「吁嗟嗚呼」、失聲。

關關（鳥の聲）、嚶嚶（虫の聲）、蕭蕭（馬の聲）、丁丁（伐木の音）

鍵詞⇒連詞、助詞、語綴助詞、嘆詞、象声詞

演習⇒是、之、然、其、以、者、所、也の用例を詞類別に整理する。

（例）所 ①特殊指示代詞：所出 ②結構助詞（被動式）：爲世人所欽重。

14. 詞組

1-(2)で合成詞（複数語素の一定の組合せ）を見たが、複数詞の一定の組合せを詞組という。詞組は合成詞と異なり、構成要素はそれぞれ分離可能で、それぞれの意味を失っていない、独立して運用される詞からなっている。詞組は組み合わせられる詞と詞の構造形式から、また語法機能からいくつかに分類される。

[1] 詞組の構造形式による分類

詞組はその構造形式から次の7種の基本類型に分けられる。

① 連合詞組：複数の詞・詞組が並列・平等な関係にある。

詞と詞：昼夜 手足 耳目 脈與肌肉 浮而滑 天⁺ 心輪 (主目泣出)

詞組と詞組：(風府主) 足不仁、頭痛項急、目眩、鼻不得喘息

② 偏正詞組：偏の成分が正の成分を修飾・説明する。

正が名詞：勃海郡鄭人 上古聖人之教 頷下結喉上舌本 目内眥外

正が動詞・形容詞：不能言 不利 矢禁 喜嘔 數欠 大堅 切痛

③ 述賓詞組：述語と賓語に分けられる。

主不知香臭 取天⁺ 風池 惡寒 入腹中 嗜食 出鍼 失精 遺尿

④ 述補詞組：述語と補語に分けられる。

痛尤甚 痛如刺 發明 幸甚

⑤ 主謂詞組：主語と謂語に分けられる。

目眩 泣出 耳鳴 口舌乾 胸滿 小便赤黄 飲食不下 女子漏血

⑥ 複指詞組：複数の詞・詞組が同一物をあらわす。

侍醫尚藥醫學教諭法印臣多紀元堅

⑦ 介賓詞組：介詞と賓語からなる。

於列缺 以補寫

以上の7種の類型のほかに者字詞組(病者、来者)、所字詞組(所言、所用)、方位詞組(東方、前面)、数量詞組(一卷、三寸)などがある。

[2] 詞組の語法壊能による分類

詞組はその語法機能から次の3種に分けられる。

① 名詞性詞組：語法機能が名詞に相当するもの。

1. 連合詞組(名詞+名詞の場合)：肺大腸 寸関尺 男女

2. 偏正詞組(定語+名詞の場合)：新生児 治妊婦腹痛方

3. 複指詞組：玄晏先生皇甫謐

4. 者字詞組：病人手足爪甲下肉黒者

5. 所字詞組：所衛氣凝不行

- 6. 方位詞組 : 西北方 外側
- 7. 数量詞組 : 五臟六腑 三百六十五絡

② 動詞性詞組 : 語法機能が動詞に相当するもの。

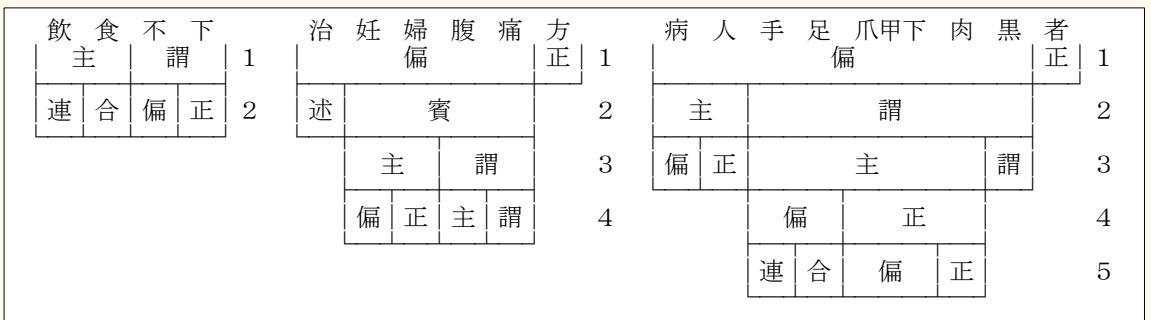
- 1. 連合詞組 (動詞+動詞の場合) : 生死 進退 去来
- 2. 偏正詞組 (状語+動詞の場合) : 久坐 深刺 乱下
- 3. 述賓詞組 (動詞+賓語の場合) : 問病 診脈 用鍼
- 4. 述補詞組 (動詞+補語の場合) : 晒乾 擊破
- 5. 能願詞組 (能願動詞+動詞) : 可刺 宜灸 願聞

③ 形容詞性詞組 : 語法機能が形容詞に相当するもの。

- 1. 連合詞組 (形容詞+形容詞の場合) : 寒熱 玄黄 大小 肥瘦
- 2. 偏正詞組 (状語+形容詞の場合) : 甚熱 微妙 不安
- 3. 述補詞組 (形容詞+補語の場合) : 深篤 熱如火

[3] 複雑詞組の分析 (二分法逐層分析)

詞組の構造関係は単純なものだけではなく、「飲食不下」のように飲食という主語の部分
部分が飲と食からなる連合詞組で、さらに謂語の部分の不下が副詞+動詞という偏正詞
組となっている、重層構造のものがある。



15 句子

詞や詞組を一定の語法規則によって組織した、思想交流・知識伝播などのための基本的
語言單位が句子であり、句子の構成成分すなわち句子成分や句子の種類を扱うの

が句法である。句子成分は次の6種に分けられる。

①主語、②謂語、③賓語、④定語、⑤状語、⑥補語

句子の基本成分は主語と謂語であり、主語が前、謂語が後に来る。例えば「頭痛」では頭が主語、痛が謂語である。謂語動詞の後に伴われる成分を賓語という。例えば、「陰陵泉主洞泄」では洞泄（病名）が賓語である。主語または賓語を修飾するものが定語であり、主語または賓語の前に置かれる。謂語を修飾する成分で謂語の前に置かれるものが状語であり、また後に置かれるものが補語である。

句子はその構造によって①名詞謂語句・動詞謂語句・形容詞謂語句、②単句・複句、③完全句・簡略句、④無主句・独詞句などに分けられ、また内容によって陳述句、疑問句、祈使句、感嘆句などに分けられる。

[1] 句子成分の分類

① 主語

：句子の中で謂語の主体が誰または何であるかをあらわす。

1. 名詞・名詞性詞組 : 水溝主水腫。今時之人則不然。
2. 代詞、代詞を含む詞組 : 我欲死。
3. 数量詞 : 一日一夜有十二時。
4. 動詞・動詞性詞組 : 生之有度。刺之有理。
5. 形容詞・形容詞性詞組 : 甘緩。

② 謂語

：主語がどうする、どうであるまたは何であるかをあらわす。

1. 動詞・動詞性詞組 : 肘擊。臂不舉。
2. 形容詞・形容詞性詞組 : 手清。尺脈細而急。
3. 代詞 : 其故何也。
4. 数量詞 : 經脈十二。長一寸六分。
5. 名詞・名詞性詞組 : 四者時也。骨者、髓之府。

③ 賓語

：謂語の及物動詞に伴う誰または何をあらわす。

1. 名詞・名詞性詞組 : 雖聖智神人、不能活死人存亡國也。
2. 代詞 : 扁鵲獨奇之、常謹遇之。
3. 數量詞 : 先服一升。
4. 動詞・動詞性詞組 : 視死、別生。
5. 形容詞・形容詞性詞組 : 入微、穿細。上高而歌。
6. 介賓詞組 : 拘於鬼神。惡於鍼石。

④ 定語

: 主語または賓語を修飾する。

1. 形容詞・形容詞性詞組 : 知鍼知藥、固是良醫。
2. 數量詞 : 如三菽之重。
3. 名詞・名詞性詞組 : 藏靈蘭之室。
4. 代詞 : 醫不三世、不服其藥。
5. 動詞・動詞性詞組 : 用鍼之法、以補寫爲先。

⑤ 状語

: 謂語の前に置かれてどのようにをあらわす。

1. 副詞 : 月餘益劇。盡與扁鵲。
2. 名詞 : 4.-(2)-⑤参照。
3. 動詞・動詞性詞組 : 5.-(2)-③参照。
4. 数詞 : 人一呼、脈再動。
5. 形容詞 : 在心易了、指下難明。
6. 介賓詞組 : 月事以時下。

⑥ 補語

: 謂語の後に置かれて状況を説明する。

1. 形容詞・形容詞性詞組 : 肺脹滿膨膨。
2. 動詞・動詞性詞組 : 腰痛不可以挽仰。背僂如龜。
3. 數量詞 : 鍼入三分。可灸三壯。
4. 副詞 : 肩上熱甚。
5. 介賓詞組 : 寸口反小於人迎也。

鍵詞⇒詞組・連合詞組・偏正詞組・述賓詞組・述補詞組・主謂詞組・複指詞組・介賓詞組・者字詞組・所字詞組・數量詞組・名詞性詞組・動詞性詞組・形容詞性詞組・二分法遂層分析・句子成分・主語・謂語・賓語・定語・狀語・補語
演習⇒『素問』宝命全形論の二分法遂層分析と句子成分を謂べる。

16. 句子の種類

[1] 句子の構造による分類

① 単句・複句

単句とは主語・謂語の関係が一回だけ成立する句子をいい、複句とは複数の主謂構造がある句子をいう。複句については章を改めて論ずる。

② 完全句・簡略句

完全句とは主要成分である主語・謂語、および必要な他の成分を具備した句子をいい、簡略句とは一個ないし数個の成分が省略された句子をいう。簡略句については章を改めて論ずる。

③ 無主句・独詞句

無主句とは「夏六月、雨」のように謂語だけからなり、主語がない句子をいい、独詞句とは「然（はい）」、「善（よろしい）」のように単一の詞だけからなる句子で、併せて単部句という。

[2] 句子の内容による分類

① 陳述句

：内容が状況の説明、または質問の回答である句子。

五行者、金木水火土也。——『素問』藏氣法時論篇

胃者、平人之常氣也。人无胃氣曰逆。逆者死。——『素問』平人氣象論篇

有下部、有中部、有上部。部各有三候。三候者、有天、有地、有人也。

『素問』三部九候論篇

② 疑問句

：疑問の語気を表示する句子。

1. 是非問句：そうかそうでないかの回答を要求する句子。

事有五過四徳、汝知之乎。（「乎」は疑問語気）——『素問』疏五過論篇

諸家鍼書載「某穴鍼幾分、留幾呼、灸幾壯」、出於經歟否歟。（「歟」、「否」は疑問語気）——汪機『鍼灸問對』

周身經絡及穴俞相去分寸、經穴起止、十二經納支干等條、古有歌訣、亦可讀否。（「否」は疑問語気）——汪機『鍼灸問對』

2. 特指問句：「誰、孰、何、安」等の疑問代詞を用いてその代詞の内容の回答を要求する句子。

平人何如。（どのようなか）——『素問』平人氣象論篇

經有五風、何謂。（どんな意味か）——『素問』金匱真言論篇

毒藥治其內、鍼石治其外、或癒、或不癒、何也。（なぜか、其故何也）

『素問』移精變氣論篇

經脈十二絡脈十五、何始、何窮也。（どこか、何處）——『難經』二十三難

3. 反問句：否定疑問の形式で肯定の意思を表示し、また肯定疑問の形式で否定の意思を表示する句子。「豈、寧、其」等の反語を表す語気副詞を用いる。

誇其鍼之神妙、寧不爲識者笑耶。——汪機『鍼灸問對』

病既屬內、非借湯液之蕩滌、豈能濟乎。——汪機『鍼灸問對』

③ 祈使句

：請求、命令、禁止などの意思を表示する句子。

得失之意、願聞其事。——『素問』藏氣法時論篇

生而勿殺、予而勿奪、賞而勿罰。——『素問』四氣調神大論篇

④ 感嘆句

：驚嘆、悲喜等の強い感情を表示する句子。

嗚呼遠哉。——『素問』疏五過論篇

妙乎哉問也。——『素問』三部九候論篇

[3] 句子中の謂語の性質による分類

① 動詞謂語句（叙述句）

：人や事物の動作行為、發展変化を叙述する。

人一呼、脈再動。（賓語なし）——『素問』平人氣象論篇

余聞九鍼於夫子。（賓語＋補語）——『素問』三部九候論篇

余聞謬刺、未得其意。(未得＝偏正詞組＋賓語) ——『素問』謬刺論篇

② 形容詞謂語句 (描写句)

: 人や事物の性質状態を描写する。

髮始白。 ——『素問』上古天真論篇

耳目聰明。 ——『素問』正氣通天論篇

日月不明。 ——『素問』四氣調神大論篇

③ 名詞謂語句 (判断句)

: 時に主語の後に者、謂語の後に也がある。

風者百病之始也。 ——『素問』骨空論篇

上部之人、耳前之動脈。 ——『素問』三部九候論篇

[4] 被動句

句子の主語が動作行為の主動者でなく、動作行為の支配対象(すなわち受動者)である句子。被動句には次のような表現形式がある。

① 為＋主動者＋所＋動詞

妄言作名、爲粗所窮。(窮は窮其詐で見破る) ——『素問』微四失論篇

② 為＋主動者＋動詞

兔不可復得、而身爲宋國笑。 ——『韓非子』

③ 動詞＋於(于)＋主動者

人之傷於寒也、則爲病熱。 ——『素問』熱論篇

④ 見＋動詞＋於(于)＋主動者

吾長見笑於大方之家。 ——『莊子』秋水

⑤ 見＋動詞

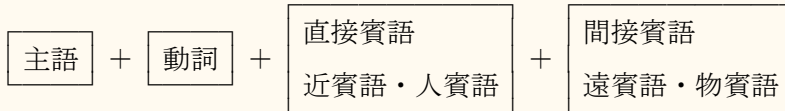
逆病人之心而不見用、不若順病人之心而獲利也。 ——張從正『儒問事親』

⑥ 非被動句と形式的差異のないもの(暗被動句)

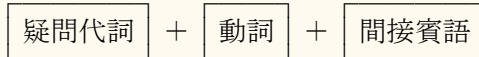
雷公請曰「臣授業傳之」。 ——『素問』解精微論篇

[5] 双賓語句

双賓語句の一般形式



近賓語が疑問代詞（誰）である時の特殊形式



① 給与類

「給・與・予・遺・授・賜」等の動詞を用い、「甲（主語）が乙（近賓語）に丙（遠賓語）を与える」の意味を表示する。

客從遠方來、遺我雙鯉魚。 ——（古詩）

② 教示類

「教・示・告・訓・言・問」等の動詞を用い、「甲が乙に丙を教示（または発言）する」の意味を表示する。

后稷教民稼穡。 ——『孟子』

③ 作為類

「作・為・樹・立」などの動詞を用い、「甲が乙に丙をつくる」の意味を表示する。

時則有全元起者、始爲之訓解。 ——『素問』新校正序

④ 奪取類

「奪・取・受・得・求・赦」等の動詞を用い、「甲が乙から丙を減じる」の意味を表示する。

臣意即避席、再拜受其脈書上下經。 ——『史記』扁鵲倉公列伝

⑤ 致使類

「飲・食・負・生」等の動詞を用い、「甲が乙に丙を～させる」の意味を表示する。

天食人以五氣。 ——『素問』六節藏象論篇

天下負之以不義之名。 ——『史記』黥布列伝

⑥ 称谓類

「称・謂・号」等の動詞を用い、「乙を丙と呼ぶ」を示す。

伏羲、神農、黄帝之書、謂之三墳。 ——『素問』王冰序

⑦ 地位賓語をもつ双賓語句

寧生而曳尾塗中。 ——『莊子』秋水

⑧ 数量賓語をもつ双賓語句

漢軍圍之數重。 ——『史記』項羽本紀

漢購我頭千金邑萬戸。 ——『史記』項羽本紀

[6] 特殊な動賓句

① 対動用法

自動詞＋動作行為の対象者（受動者ではない）。

先生能以術仁其民。 ——『與薛寿魚書』

② 供動用法

「～（名詞）を供給する」という動詞＋供給の受動者。

君子問人之寒則衣之、問人之飢則食之、稱人之美則爵之。 ——『礼記』表記

③ 属性賓語句

「～（名詞）にする」という動詞＋その名詞の所属関係を表す語。

張易水醫、如濂溪之圖太極、分陰分陽。 ——『諸医論』

鍵詞⇒単句・複句・完全句・簡略句・無主句・独詞句・陳述句・疑問句・祈使句・感嘆句・動詞謂語句（叙述句）・形容詞謂語句（描写句）・名詞謂語句（判断句）・被動句・双賓語句
演習⇒『素問』宝命全形論の句子の内容による分類、謂語の性質類による分類、被動句、双賓語句を調べる。

資料について

平成10年度第1回にあたる4月12日の中級課程には昨年度中級課程から10名、昨年度初級課程から4名、一昨年度初級課程から1名、合計15名の受講者があり、これは昨年度最終講義3月8日の中級課程8名、初級課程4名、2クラス合計12名の受講者を上回るもので熱気を感じさせた。

しかし、昨年度から演習に使っている『素問』宝命全形論篇の資料として先月上梓された『素問攷注』の複写を配布していたところ、さっそく演習への不満が述べられた。「中国医学古典と語法学」第6回の演習課題「『素問』宝命全形論篇の二分法逐層分析」で出てくる詞組分類を受講者自身が行ったものと講師が行ったものが違うのはどうしてかということらしい。これは演習の場面を思い出してみると思い当たるものがあった。

右の例（顧本『素問』8-1a9）の第3レベルで「全形」というところに、講師が黒板に「述賓詞組」と書くと、「なぜ偏正詞組でないのか」と質問があったのである。

君 王 衆 庶、				盡 欲 全 形。				
主				謂				1
連		合		述		賓		2
連	合	連	合	偏	正	述	賓	3

問題はこれだけではないのであろうが、実はこの「全」字の解釈は日本人学習者の陥りやすい大きな盲点を示しているのである。その盲点全体について、まず資料4の『日本語と中国語』を挙げておきたい。この箇所では「同文同軌」の「同」が動詞であることを秦始皇帝の故事を踏まえていねいに説明しているが、この「同」や先ほどの「全」を形容詞に読みたくなってしまふ人にはこの書は必読である。同じ漢字を用いながらその意味が中国と日本でどれほど違っているのか、こんなに面白く学べる書物はおそらく、他にはないからである。

資料1は『漢語大詞典』から「全」の字義13項をすべて取った。

- ①純色玉、②完美、齊全は『説文』にさかのぼる。『説文』では見出し字は「全」で、「全、完也。从入、从工。全、篆書全。从王。純玉曰“全”」とする。段注は「按、篆當是籀之誤」といい、現字体は籀文の古い書体である。ちなみに「完」を『説文』で見ると「完、全也」とあり、いわゆる互訓となっている。まったくなじみの無い字義だが、『新字源』でも「全」を見ると「①欠けたところのない玉、純玉」とある。
- ③満は「呉都賦」の「月虧全」しか用例がない。
- ④保全、これが動詞の字義である。『孫子』の「全國爲上、破國爲下」の「破る」と対にした用例に注目。
- ⑤⑥省略。
- ⑦すべての、これは現代日本語に近い形容詞の字義。ただ古代には「全燕」、「全秦」のように国名を修飾するものしかなく、「全人類」は現代の用例である。
- ⑧⑨省略。
- ⑩痊に通じて、病気が癒える。
- ⑪⑫⑬省略。

資料1：『漢語大詞典』より「全」字義→

4 全 [quán<广韵>疾緣切,平仙,從。]①純色玉。〈周礼·考工记·玉人〉:“天子用全,上公用龍,侯用璜,伯用將。”郑玄注:“鄭司農云:‘全,純色也。’……玄謂:全,純玉也。”②完美;齊全。〈周礼·考工记·弓人〉:“得此六材之全,然後可以爲良。”郑玄注:“全,無瑕病者。”〈荀子·劝学〉:“君子知夫不全不粹之不足以爲美也,故誦數以貫之,思索以通之。”〈淮南子·时则训〉:“乃命宰祝,行犧牲,案芻豢,視肥醴全粹。”高诱注:“全,無虧缺也。”唐韓愈〈黃家賊事直狀〉:“兵鎮所處,物力必全。一則不敢輕有侵犯,一則易爲逐便控制。”〈儿女英雄传〉第四回:“好一個小黑驢……外帶着還是四個銀蹄兒,腦袋上還有個玉頂兒,長了個全,可怪不怪。”亦指集某方面之大成。宋罗大经〈鶴林玉露〉卷二:“〔歐陽公〕作奏議,便庶幾陸宣公,雖游戲作小詞,亦無愧唐人〈花間集〉,蓋得文章之全者也。”③滿;盈。〈文選·左思〈吳都賦〉〉:“窮極極形,盈虛自然,蚌蛤珠胎,與月虧全。”李善注引〈吕氏春秋〉:“月望則蚌蛤實,月晦則蚌蛤虛。”④保全。〈孙子·謀攻〉:“凡用兵之法,全國爲上,破國次之。”〈史记·伍子胥列传〉:“我知往終不能全父命,然恨父召我以求生而不往。”南朝宋鮑照〈野鵲賦〉:“全殞卵而來鳳,放乳鷹而感麟。”〈续资治通鑑·宋孝宗淳熙三年〉:“浩忠憤激烈,言切時弊,以此取忌於衆,帝察其衷,始終全之。”〈二刻拍案惊奇〉卷十五:“其夫半喜半疑;喜的是得銀解救,全了三命。”⑤成全。〈史记·司马相如列传〉:“天下之壯觀,王者之丕業,不可貶也。願陛下全之。”〈儿女英雄传〉第十六回:“待他再耳受教,便好全他那片孝心,成這老頭兒這番義舉。”⑥順,循。見“全天①”。⑦整个的。〈战国策·燕策一〉:“秦、趙相弊,而王以全燕制其後。”汉枚乘〈上書重諫吳王〉:“今漢據全秦之地,兼六國之衆。”郭沫若〈夜〉詩:“你把這全人類來擁抱,再也不分什麼貧富、貴賤。”⑧副詞。都,全都。(1)总括全部。表示所指范围内无一例外。唐和凝〈望梅花〉詞:“春草全無消息,臘雪猶餘蹤跡。”老舍〈四世同堂〉五七:“大家全聯合起來,告訴日本人,鉄沒有,錢沒有,要命有命!”巴金〈探索集·世界語〉:“我在南京上學,課余向上海世界語書店函購了一些書,就一本一本本地讀下去,書不多,買得到的全讀了。”(2)完全。表示程度上百分之百地。沈从文〈从文自傳·我讀一本小書時又讀一本大書〉:“我在作孩子的時代,原本也不是個全不知自重的小孩子。”又“有了這東西,即或全不會漂浮的人,也能很勇敢的向水深處回去。”⑨副詞。很,非常。唐杜甫〈南鄰〉詩:“錦里先生烏角巾,園收芋粟不全貧。”宋周邦彥〈鬪奴兒·咏梅〉詞:

(1158) 人(入)部 ④ 全

“南枝度臘開全少,疏影當軒。一種宜寒,自其清澹別有緣。”⑩通“痊”。病愈。〈周礼·天官·醫師〉:“歲終則稽其醫事,以制其食,十全爲上,十失一次之。”郑玄注:“全,猶愈也。”唐韓愈〈祭十二郎文〉:“孰謂少者歿而長者存,彌者夭而病者全乎!”⑪通“詮”。指伏兵。馬王堆漢墓帛書〈戰國縱橫家書·蘇秦使盛慶獻書于燕王章〉:“不功(攻)齊,全于介(界)。”注:“全,通‘詮’。〈廣雅·釋詁三〉:‘詮,伏也。’”⑫通“脛”、“脛”。男孩的生殖器官。〈老子〉:“含德之厚比於赤子……骨弱筋柔而握固,未知牝牡之合而全作。”傅奕本作“脛”,河上本作“脛”。⑬姓。三國魏有全琮。見〈三國志·魏志·全琮傳〉。

①【全一】 謂忠誠不渝。〈荀子·仲尼〉:“主疏遠之,則全一而不倍;主損絀之,則恐懼而不怨。”

②【全丁】 對國家有完納賦稅、承擔徭役義務的成年

資料2は同じく『漢語大詞典』から「全身」の詞義であるが、「①生命あるいは名節を保全する」が古代から中世まで4例を挙げるのに「②すべての身体」は現代の1例を挙げるのみである。

資料2：『漢語大詞典』より「全身」字義→

資料3は『素問・靈樞総索引』から。

- 1 「徳全」は完、
 - 2 「却老而全形」は「却ける」と対であるから動詞。
 - 3、4は「淳くする」、「積む」と対であるから動詞。
 - 5は能願動詞の後なので動詞。
 - 12～14は「以全」と以がつくので動詞。
 - 6、7、16、27、28は「萬全」であるが、16に「萬舉萬全」と「挙げる」の対なので動詞。
 - 10、11、15、18、19、20、21、22、23、24、25、26は「癒す」。
- 残った4例の中に「すべての」を意味するものはなく、8も動詞である。

資料3：『素問・靈樞総索引』より「全」29条→

資料5は「中国医学古典と語法学」第7回で被動句の諸形式を論じた際、「現代中国語で学んだ“被～”が出ていない」と質問があったので。この形式が中世以後のものであることがわかる。

(1160) 人(入イ)部 ④ 全

【全身】 ①保全生命或名节。《诗·王风·君子阳序》：“君子遭亂，相招爲祿仕，全身遠害而已。” 三国吴张俊《为吴令谢洵求为诸孙置守家人表》：“若使羽位承前緒，世有哲王，一朝力屈，全身從命，則楚廟不隳，有後可冀。” 北宋王禹偁《四皓庙碑》：“是知先生之出，非獨謀漢也，實將救時也。先生之退，非獨全身也，亦將矯世也。” 《初刻拍案惊奇》卷十二：“適聞這位貴友，途路之中，如此輕薄無狀，豈是個全身遠害的君子。” ②整个身体。茅盾《子夜》三：“她用一个脚尖支持着全身的重量，在那平穩光軟的彈子台的綠呢上飞快地旋轉。”

【全身麻醉】 亦省称“全麻”。医学用语。临床上用吸入麻醉或静脉麻醉等方法，使病人全身的意识 and 感觉消失，以顺利进行手术。

【全】 全

1	以其徳○不危也	S.01	01-08a05
2	能却老而○形	S.01	01-09b08
3	淳徳○道	S.01	01-10a04
4	積精○神	S.01	01-10a06
5	此天地陰陽所不能○也	S.05	02-08b03
6	可以萬○	S.10	03-12b09
7	服之萬○	S.14	04-05b08
8	盡欲○形	S.25	08-01a09
9	可使○也	S.40	11-07b02
10	治之不○	S.70	20-27b09
11	治之不○	S.70	20-29a03
12	食歳穀以○其眞	S.71	21-04a10
13	以○其眞	S.71	21-11b03
14	以○眞氣	S.71	21-14a03
15	尚未能十○	S.74	22-26a06
16	萬舉萬○	S.74	22-31b05
17	臥者便身○	S.75	23-02b01
18	可以十○	S.76	23-03a08
19	猶未能以十○	S.76	23-03a10
20	皆言十○	S.78	23-09a05
21	所以不十○者	S.78	23-09a09
22	診可十○	S.80	24-07b08
23	未必能十○	S.81	24-08a05
24	上工十○九	L.04	02-06a04
25	中工十○七	L.04	02-06a05
26	下工十○六	L.04	02-06a05
27	可以萬○	L.35	11-09a09
28	萬○也	L.39	12-06a01
29	其不可○乎	L.60	17-05b06

被

1 [bèi <广韵>皮彼切,上紙,並。] ①被子。

②表示被动。犹让,为。《北史·麦铁杖传》：“吾荷國恩，今是死日。我得被殺，爾當富貴。” 唐元稹《说劍》诗：“曾被掛樹枝，寒光射林藪。” 《儒林外史》第十一回：“楊執中恍然醒悟道：‘是了，是了，這事被我這個老嫗所誤！’” 巴金《春》十二：“她也许是被希望鼓舞着，也许是被焦慮折磨着。她自己也不能明确地知道。”

資料5：『漢語大詞典』より「被」字

『六国古文』を整理統一した秦の始皇帝

中国人は歴史狂といつてよいほど、歴史好きです。このことは、原著『日本人と中国人』（ノン・ブック）にも書きましたのでくり返しません。ただコトワザや格言にしても、たいいてい歴史上の故事を踏まえているものだ、ということに注意していただきたいのです。

まえにふれた『同文同軌』は、秦の始皇帝の事績について述べられた言葉です。秦の始皇帝が中国を統一したのは、西暦紀元前二二一年のことでした。それ以前は『戦国時代』です。

戦国時代には、秦以外に、齊、楚、燕、趙、韓、魏と、有力な六つの国がありました。これらの国の文字は、おなじ漢字系統ですが、それぞれすこしずつ違っていたのです。出土品の金、銀、銅、鉄の貨幣、現在のわれわれには読めない文字があり、そうしたものをひっくるめて『六国古文』といひます。

秦の始皇帝は、天下を統一しますと、秦の文字をもとに、点画を簡略化し（ここで整理しているのです！）、ほかの六国古文をせんぶ廃止したのです。『同文』とは、この故事にもとづいていひます。

ですから、文字が同じである、といったおだやかな状態ではなく、反対に文字が同じでな

ったのを、むりやりに同じくさせた、という押しつけのニュアンスをもっているのです。

『同軌』もそうです。戦国時代、各国の車は車輪のはばが、それぞれ違っていました。舗装していない当時の道路は、雨が降ればぬかるみになり、晴れるとカチカチに乾き、車輪のあとがレールのように、そこに深々ときざみ込まれます。これがワダチです。

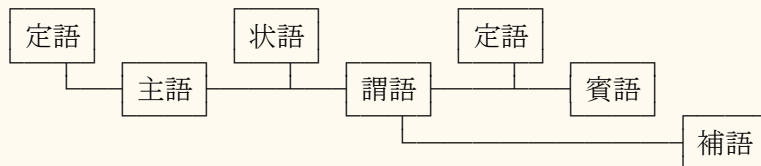
車はその車輪を、道路の天然レールに入れて走ったのです。ワダチのはばの違う他国の車は通れない仕掛けになっていました。当時の戦争は、馬に曳かせた戦車を使ったのですから、ワダチのサイズが違うのは、他国の戦車の侵入を防ぐ方法だったのです。

秦の始皇帝は、ほかの六国を滅ぼし、天下を統一して、もうほかの国というものは無くなったので、そんな不便なシキタリをやめるように命じたのです。おなじ車で、全国どこへでも行けるように、ワダチのサイズを統一しました。これも命令によって、同じでなかったものを、むりやりに同じくさせたのです。統制です。強権発動であります。

資料4：陳舜臣他『日本語と中国語』（徳間文庫より）

17. 語序変化

句子成分の一般的配列（語序）



句子成分の位置は中国語では一般的に上の図のように固定的であるが、古漢語においては表現の必要に応じて、または言語習慣によってその一部について次のような変化が生じることがある。

[1] 主謂倒装 謂語 + 主語

主語が謂語の前にあるのが古今を通じて中国語の正常な語序であるが、古漢語では一定の条件下に謂語が主語の前に置かれることがある。主語が前、謂語が後にある正常な語序と区別するためにこうした現象を主謂倒装という。翻訳に際しては主語と謂語の正確な識別が必要である。

① 感嘆句

：謂語が形容詞または程度副詞で、語気を強調する場合。

妙乎哉、論也。 —— 『素問』八正神明論篇

嗚呼遠哉、天之道哉。 —— 『素問』六微旨大論篇

博哉、聖帝之論。 —— 『靈樞』衛氣

② 疑問句

：謂語が疑問代詞または人称代詞で、語気を強調する場合。

誰歟、哭者。 —— 『礼記』檀弓

子邪、言伐莒者。 —— 『呂氏春秋』重言

③ 陳述句

：まれに、謂語を特に強調する場合。

或言久疾之不可取者、非其說也。 —— 『靈樞』九針十二原

[2] 賓語前置 賓語 + 動詞／介詞

賓語は謂語動詞や介詞の後におかれる句子成分である。しかしある種の言語環境において、またはある種の語法手段を通じて古漢語では賓語が謂語動詞や介詞の前に置かれ、こうした現象を賓語前置という。

① 賓語が否定句中の代詞である場合。

不患人之不己知、患不知人也。 ——『論語』学而

雖大風苛毒、弗之能害。 ——『素問』生氣通天論篇

神有餘、則寫其小絡之血、出血、勿之深斥。 ——『素問』調經論篇

中世有長桑扁鵲、漢有公乘陽慶及倉公、下此以往、未之聞也。 『傷寒論』原序

② 賓語が疑問句中の疑問代詞である場合。

吾誰欺。欺天乎。 ——『論語』子罕

精神內守、病安從來。 ——『素問』上古天真論篇

何以知懷子之且生也。 ——『素問』腹中論篇

何謂五有餘二不足。 ——『素問』奇病論篇

③ 賓語が近指代詞「是」、反身代詞「自」である場合。

君子是則是倣。 ——『詩經』鹿鳴

是以因天時而調血氣也。 ——『素問』八正神明論篇

是謂因形而生病。 ——『靈樞』五變

故聖人自治而未見有形也。 ——『靈樞』玉版

④ 賓語 + 之／是 + 動詞

其罪之恐。 ——『春秋左氏傳』昭公三十一年

此之謂也。 ——『素問』四氣調神大論篇

四方是維。 ——『詩經』節南山

⑤ 唯（惟、維） + 賓語 + 是 + 動詞

惟名利是務。 ——『傷寒論』序

惟五穀是見。 ——『養生論』

⑥ 特に賓語を強調する場合

臣死且不避、卮酒安足辭。 ——『史記』高祖本紀

色以應日、脈以應月。 ——『素問』移精變氣論篇

[3] 定語後置 中心詞 + 定語

定語は中心詞となる主語や賓語の前に置かれ、それらを修飾する句子成分である。しかし定語を強調するための一定の条件下では中心詞の後に置かれることがある。

① 中心詞 + 定語 + 者

病口甘者 ——『素問』奇病論篇

婦人少腹腫者 ——『素問』脈解篇

② 中心詞 + 之 + 定語

帶長鋏之陸離、冠切雲之崔嵬。 ——『楚辭』涉江

18. 簡略句

[1] 句子成分の省略

ある句子の句子成分のどれかが省略されても、その句子の意味伝達に影響がないとき、その句子成分が省略されることがある。省略の方式には次のようなものがあり、句子成分が省略された句子を簡略句という。

- ① 対話省：対話において反復される句子成分の省略
- ② 承前省：前文に出現した句子成分の省略
- ③ 後蒙省：後文に出現する句子成分の省略
- ④ 汎指省：普遍的で具体性がない句子成分の省略
- ⑤ 自述省：自己の事情を語る句子における主語の省略

[2] 主語の省略

① 対話省

雷公請問「……」。黃帝答曰「……」。□問曰「……」。 ——『素問』方盛衰論篇

② 承前省

余嘗上清冷之臺、中階而□顧。□匍匐而□前、則□惑。 ——『靈樞』大惑論

③ 後蒙省

七月□在野、八月□在宇、九月□在戸、十月蟋蟀在我床下。 ——『詩經』七月

④ 汎指省

□從陰陽則生、□逆之則死。 — 『素問』四氣調神大論篇

⑤ 自述省

黄帝問曰「□願聞十二藏之相使、貴賤何如」。

岐伯對曰「悉乎哉、問也。□請遂言之」。 — 『素問』靈蘭秘典論篇

[3] 謂語の省略

① 対話省

扁鵲曰「其死何如時」。曰「・鳴至今」。曰「收乎」。曰「未□也」。

『史記』扁鵲倉公列伝

② 承前省

夫病傳者、心病先心痛…三日胸支痛…三日不已死、冬夜半□、夏日中□。

『素問』標本病伝論篇

③ 後蒙省

在足少陽之本末□□、亦視脈之陷下者灸之。 — 『靈樞』邪氣臟腑病形

④ 語義自明のもの

其寒也、不從外□、皆自内□也。 — 『素問』瘧論篇

[4] 賓語の省略

① 対話省

謂曰「服湯、否」。曰「已服□」。 — 『甲乙經』序

② 承前省

若不精通於醫道、雖有忠孝之心、仁慈之性、君父危困、赤子塗地、無以濟之。此固聖賢所以精思極論盡其理也。由此言之、焉可忽□乎。 — 『甲乙經』序

③ 介詞賓語「之」の省略

他山之石、可以□攻玉。 — (『詩經』鶴鳴)

始可與□言詩已矣。(『論語』学而では子貢、八佾では子夏についての孔子の言葉にある)

[5] 定語の省略

人称代詞 (だれそのの)

□宅邊有五柳樹。因以爲□號。 — 『五柳先生伝』

[6] 介賓詞組の介詞の省略

人以天地之氣生、□四時之法成。 ——『素問』宝命全形論篇

余欲□鍼除其疾病。 ——『素問』宝命全形論篇

[7] 仮設条件を表す偏句などの省略

方其盛時、[若刺之] 必毀。因其衰也、[若刺之] 事必大昌。 『素問』瘧論篇

鍵詞⇒語序変化、主謂倒装、賓語前置、定語後置、簡略句、句子成分の省略、対話省、承前省、後蒙省、汎指省、自述省、介詞の省略、仮設条件を表す偏句の省略

演習⇒(1) 16章の例文の語序変化を正常な語序に改める。(2) 17章の例文の□に適当な詞をあてはめる。

19. 複句

15章「句子の種類」(1)節「句子の構造による分類」で述べたように、複数の単句を構成要素とする句子を複句という。複句を構成する単句を分句といい、複句は分句間の関係構造によって次のように分類される。

[1] 連合複句——分句間の関係がほぼ対等であるもの

① 並列複句

分句が関連した内容、あるいは連続して発生した事柄を述べるもので、一般に分句の間に関連詞を用いない。

木得金而伐、火得水而滅、土得木而達、金得火而缺、水得土而絶。(分句が関連内容を述べる場合) ——『素問』宝命全形論篇

人以天地之氣生、(人以) 四時之法成。(連続して発生した事柄を述べる場合)

『素問』宝命全形論篇

② 対比複句

相対・相反的な二つの分句だけかならなるもの。

天有寒暑、人有虚實。(相対的 ——『素問』宝命全形論篇

上古之人、春秋皆度百歳、而動作不衰；今時之人、年半百而動作皆衰者、時世異耶、人將失之耶。（相反的）——『素問』上古天真論篇

③ 選択複句

複数の分句の表示内容から一件を選択させるもの、選択を示す関連詞を用いる。

人年老無子者、材力盡邪、將天數然邪。——『素問』上古天真論篇

寧爲鷄口、無爲牛後。——『史記』蘇秦伝

且予與其死於臣之手、無寧死於二三子之手乎。——『論語』子罕

④ 補充複句

前の分句が表示した内容を後の分句が補充説明する。

如臨深淵、手如握虎、神無營於衆物。——『素問』宝命全形論篇

太陽病不解、熱結膀胱、其人如狂、血自下、下者自愈。『傷寒論』弁太陽病脈并治

⑤ 記述複句

前の分句が表示した内容を後の分句が詳述説明する。

故鍼有懸布天下者五（…中略…）：一曰治神、二曰養身、三曰知毒藥爲眞、四曰制石小大、五曰知府藏血氣之診。——『素問』宝命全形論篇

後分句に「乃、然後、遂」等の連詞を用いてその内容が前分句に関連して発生したことを記述する。

五藏已定、九候已備、後乃存鍼。——『素問』宝命全形論篇

必先知經脈、然後知病脈。——『素問』三部九候論篇

皆由未嘗親見、逐不避汚穢。——『医林改錯』

⑥ 按断複句

論述の根拠を勘案する「按」の分句とその結果を判断する「断」の分句とからなる。「断」分句は「是……也」、「爲……也」、「此……也」等の判断句となる。

今末世之刺也、虚者實之、滿者虚之、此皆衆工所共知也。『素問』宝命全形論篇

脈至如散葉、是肝氣予虚也。——『素問』大奇論篇

經絡受邪入藏府、爲内所因也。——『金匱要略』臟腑經絡先後病脈証

[2] 偏正複句——主たる正句と従たる偏句からなる

① 因果複句

偏句が原因を正句が結果を表す。

正句に「故、是故、是以」等の因果連詞を用いるもの。

木得金而伐、(…中略…) 故鍼有懸布天下者五。 『金匱要略』 臟腑經絡先後病脈証
五藏之道、皆出於經隧、以行血氣、血氣不和、百病乃變化而生、是故守經隧。

『素問』 調經論篇

因於露風、乃生寒熱、是以春傷於風邪、氣留連乃爲洞泄。 『素問』 生氣通天論篇
正句に「……者」、偏句に「……也」が用いられるもの。

虛實之要、九鍼最妙者、爲其各有所宜也。 ——『素問』 鍼解篇

② 転折複句

偏句の後にそれと相承的でない正句が続く。

正句の前に「而、然、反」などの転折連詞が用いられるもの。

今良工皆得其法、守其數、親戚兄弟遠近音聲日聞於耳、五色日見於目、而病
不愈者、亦何暇不早乎。 ——『素問』 湯液醪醴論篇

風者百病之長也、至其變化、乃爲他病也、無常方、然致有風氣也。

『素問』 風論篇

余念其痛、心爲之亂惑、反甚其病、不可更代。 ——『素問』 宝命全形論篇

③ 讓歩複句

偏句に讓歩連詞「雖、雖然、縱」等を用いて讓歩・仮定を表し、正句に時に転折
連詞を用いる。

風氣雖能生萬物、亦能害萬物。 ——『金匱要略』 臟腑經絡先後病脈証

此飲食不節、故時有病也。雖然其病且已、時故當病、氣聚於腹也。

『素問』 腹中論篇

故貴脱勢、雖不中邪、精神内傷、身必敗亡。 ——『素問』 疏五過論篇

④ 進層複句

偏句に讓歩を示す語氣副詞「尚、且」等を用いて「……でさえも」を示し、正句に
進層連詞「況、而況、何況、矧」等また句末に語氣助詞を用いて「まして……は
なおさらではないか」を示す。

木之陰陽、尚有堅脆、堅者不入、脆者皮馳。至其交節、而缺斤斧焉。夫一木
之中、堅脆不同、堅者則剛、脆者易傷、況其材木之不同、皮之厚薄、汁之多
少、而各異耶。 ——『靈樞』 五變

一劑之謬、尚不能堪、而況其甚乎。 ——『小兒則總論』

是醫之於醫、尚不能知、而矧夫非醫者。 ——『病家兩要說』

⑤ 仮設複句

偏句に仮設連詞「若、如、当、誠」否定副詞「自非、微、不」等を用いて「もしも……なら」を示し、正句に順承連詞「則、即」を用いてその条件下の結果を示す。

若有乾耳丁聾、則耳無聞也。 — 『靈樞』厥病

若五藏元真通暢、人即安和。 — 『金匱要略』臟腑經絡先後病脈証

如有用我者、吾其爲東周乎。 — 『論語』陽貨

先祖當賢、後子孫必顯。 — 『荀子』君子

誠能留心研窮、究其微臣責、則可以比蹤古賢、代無夭橫矣。 — 『脈經』序

自非才高識妙、豈能探其理致哉。 — 『傷寒論』序

微管仲、吾其被髮左衽矣。 — 『論語』憲問

不入虎穴、不得虎子。 — 『後漢書』班超伝

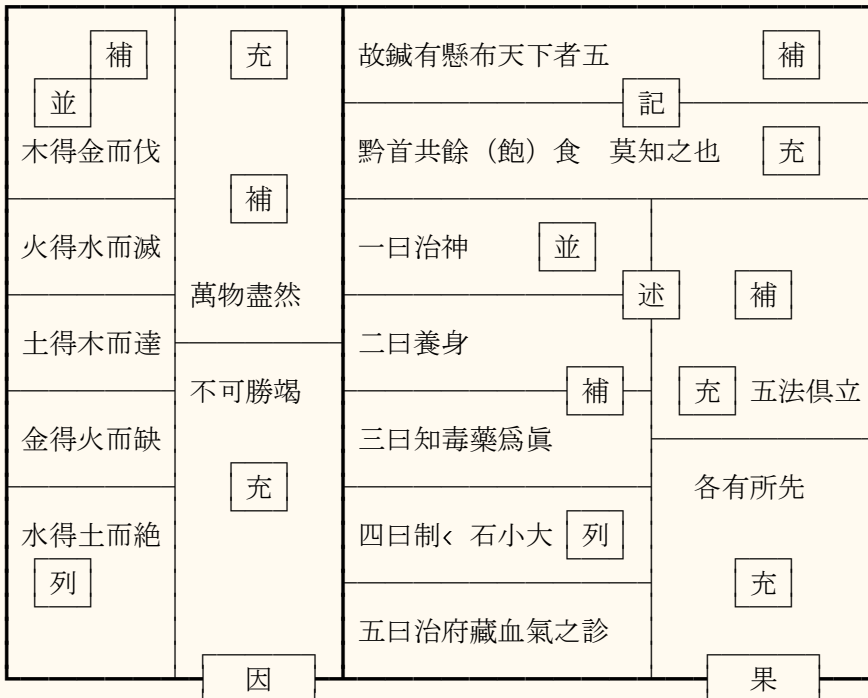
仮設の関連詞を用いないもの：

寸口脈浮而緊、緊則爲寒、浮則爲虛、寒虛相薄、邪在皮膚。

『金匱要略』中風歷節病脈証并治

[3] 多重複句——分句間の関係構造は13章「詞組」[3]節「複雑詞組の分析」

でみたように重層構造を呈することがある。



[4] 緊縮複句——仮設複句の主語や仮設連詞が省略されて見かけ上単句のようになることがある。

夫脈者血之府也、長則氣治、短則氣病、數則煩心、大則病進。

(『素問』脈要精微論篇)

鍵詞⇒複句、連合複句、並列複句、対比複句、選択複句、補充複句、連合複句、並列複句、対比複句、選択複句、補充複句、記述複句、按断複句、偏正複句、因果複句、転折複句、譲歩複句、進層複句、仮設複句、多重複句、緊縮複句
演習⇒『素問』宝命全形論篇の複句分類を調べる。

常用固定格式集

古漢語中で常に連用され、もしくは相互に配合される詞と詞の組合せを「固定格式」という。固定格式に用いられる詞には配合される詞によって意味が異なったり、また同じ固定格式が用例によって複数の意味を持つことがあるので、ここではそうした多義性に注意しながら、検索の便を考慮して常用される固定格式を使用頻度の多い詞を手がかりに分類した。

[1] 所 + α 式

所以 特指代「所」+介詞「以」(名詞性詞組)

① ～する方法、道具

精明者、所以視萬物、別白黒、審短長。 ——『素問』脈要精微論篇

万物を見る道具

② ～する原因、理由

人所以汗出者、皆生於穀。 ——『素問』評熱病論篇

人の汗が出る原因は…

③ 因果連詞（だから）として用いられる

四時陰陽者、萬物之根本也。所以聖人春夏養陽、秋冬養陰、以從其根。

『素問』四氣調神大論篇

…根本である。だから聖人は…

所由… 所從… 「所」＋介詞「由」または「從」（名詞性詞組）

① ～する場所

凡三百六十五穴、鍼之所由行也。 ——『素問』氣穴論篇

鍼を行う処

② ～する原因、理由

余知其然也。不知其所由生。 ——『靈樞』五癰津液別

生じる原因

或從内、或從外、所從不同、故病名異也。 ——『素問』太陽陽明論篇

病の原因

有所… 無所… 動詞「有」または「無」＋「所」（動賓詞組）

① ～するものが有る（無い）

博學、無所弗讀。 ——『李時珍伝』

読まないものはない

② ～することが有る（無い）

既醉、無所覺。 ——『後漢書』華佗伝

麻酔のため覚えることがない

③ ～する部分が有る（無い）

黄帝内經十八卷、…亦有所亡失。 ——『甲乙經』序

亡失した部分

何所… 疑代「何」＋「所」

① ～するところ（の者）は何か（主謂倒装式）

五藏六府、皆有井榮俞經合。皆何所主。 ——『難經』六十八難

それぞれ治めるところは何か

[2] 以 + α 式

有以… **無以…** 動詞「有」または「無」 + 介詞「以」(動詞性詞組)

① ～することが有る(無い)

翼有以發隱就明。 — 『類經』序

新たな発明があることを望む。

雖扁鵲・倉公、無以加也。 — 『甲乙經』序

加えることがない

② ～する方法がある(無い)

非有以治其外、疾未易爲也。 — 方孝孺

外治の方法がなければ

余聞壽夭、無以度之。 — 『靈樞』壽夭剛柔

知る方法がない

以爲… **以謂…**

① 動詞「以」(思う) + 判断詞「爲」または「謂」(である)

其茫若望洋、淡如嚼蠟、直以爲古書不宜於今。 — 『格知余論』

古書は現在に合わぬと

② 介詞「以」(賓語省略) + 「爲」(思う)

見寢石以爲伏虎。 — 『解蔽』

横たわった岩を見て寝た虎と思う。

以…爲…

① 介詞「以」 + 賓語 + 動詞「爲」 + 賓語(名詞) : ～を～とする

灸寒熱之法、先灸項大椎、以年爲壯數。 — 『素問』骨空論篇

年齢を壯数とする。～を～と思う

拙者失理、以癒爲劇、以生爲死。 — 『漢書』芸文志

癒を劇と思う

② 動詞「以」(思う) + 賓語 + 「爲」(である) + 動詞

天下盡以扁鵲爲能生死人。 — 『史記』扁倉列伝

天下はことごとく扁鵲は死人を生かせると思う。

何以…爲

- ① 疑代「何(奚)」(なぜ) + 動詞「以」(用) + 疑語助「爲」: なぜ～を用いてしまうのか
或曰「善師者不陳、得魚者忙筌、運用之妙在於一心、何以方爲。」
汪詡庵『医方集解』自序
なぜ(いまさら)古方を用いるのか
聖賢一言、終身行之弗盡。奚以多爲。——『丹溪翁伝』
なぜ多言するのか。

可以…

- ① 能願動詞「可」(できる) + 介「以」 + 賓 + 動: ～によって～することができる
夫脈之小大・滑濇・浮沈、可以指別。——『素問』五藏生成論篇
指で別ける
夫至物微妙、可以理知、難以目識。——『養生論』
理によって知る
- ② 「可」 + 語助「以」 + 動
藥有可以久煮、有不可以久煮。——『蘇沈良方』
久しく煮るべき…

是以…

- ① 指代「是」 + 連「以」: 因果連詞(だから)
五味入口、藏於胃、以養五藏氣、氣口亦太陰也。是以五藏六府之氣味皆出於胃、變見於氣口。——『素問』五藏別論篇
氣口は太陰だ…だから…変は氣口に見れる。

以故…

- ① 連「以」 + 連「故」: 因果連詞(だから)
觀所失所得者、合脈法、以故至今知之。——『史記』扁倉列伝
得失を観る者は『脈法』と照合するから現在でもそれを知る。

[3] 何 + α 式

奈何 **如何** **若何** 動「奈」「如」「若」 + 疑代「何」(動賓結構)

① 句末の謂語：どのようなか、どうしようか

余欲鍼除其病、爲之奈何。 ——『素問』宝命全形論篇

そのためどうしよう。

若至五藏遍傳、雖廬扁亦莫可如何矣。 ——『十藥神書』跋

どうすることもできない。

② 句頭の状語：どうして～か(反問)

奈何以至精至微之道、傳之以至下至賤之人。 ——『素問』新校正序

奈…何 **如…何** **若…何** 動「奈」「如」「若」 + 賓 + 疑代「何」

① ～をどうしようか

此難成易闕之陽氣、若之何而可以供給也。 ——『格知余論』

陽気をどうすれば供給できようか。

奈爲醫者戒余勿食何。 ——『医話三則』

医たる者が余に食うなと戒るのを…

② 否定副詞 + 奈…何 etc. : ～をどうすることもできない

其在骨髓、雖司命無奈之何。 ——『史記』扁倉列伝

司命でさえ之をどうすることもできない。

何如… (何若、奚如、奚若、胡如、曷若)

① 疑代「何」 + 動「如」: ～はどうするか、どのようなか(謂語)

奇經之爲病、何如。 ——『難經』二十九難

奇經の病たるやいかん。

② 定語、状語、賓語

扁鵲曰「其死何如時」。 ——『史記』扁倉列伝

定語 いかなる時

敢問何如取之耶。 ——『荀子』哀公問

状語 いかにして

汝以爲何若。 ——『戦国策』齊策

賓語 いかならんと

- ③ 比較選択の表示：～と比べてどうか

若之力、奚若我哉。 ——『列子』力命

なんじの力は我といかん。

何有於…

- ① 介「於」＋動賓「有何」の倒置：～について何であろう

臣意且猶不盡、何有於病哉。 ——『漢書』郭玉伝

病に於て何有らん。

何…之(有)

- ① 「何」＋名詞＋結構助詞「之」(賓語前置の表示)＋動詞

何道之間。 ——『素問』举痛論篇

どんなことを問うのか。

何虚實之難辨哉。 ——『小兒則総論』

どんな虚實を弁じ難いか。

- ② 「何」＋名詞＋「之」＋有どんな～があるのか。

何目痛鼻乾之有。 ——『医学心悟』

どんな目痛鼻乾が有るか。

- ③ なぜ～であるのか。(之は前置を表示せず強調)

何得車之多也。 ——『莊子』列御寇

どうして多くの車を得たのか。

何則

- ① 「何」(理由)＋語助「則」：なぜならば

良醫之道、必先診脈處方、次即鍼灸。内外相扶、病必當愈、何則湯藥攻其

内、鍼灸攻其外。 ——『千金翼方』

内外相たすけて病必ず癒るのはなぜならば…

[4] 如 + α 式

如或… (苟或…、設或…、設使…、向使…、必若…)

① もし～ならば

如或失調、使陽氣失常。 —— 『医門棒喝』

もし失調ならば…

苟或血病寫氣、氣病寫血、是謂誅伐無過。 —— 『針灸問答』

もし血病に気を瀉せば

設或辨不眞、則誠然難矣。 —— 『小兒則総論』

もし眞を弁じなければ

向使不有公在、必爲童便・犀角・黃連・知母之所斃。 —— 『景岳全書』

必若有所損、不在此限。 —— 『千金要方』

もし損なうことがあれば…

如…然 (若…然) 動「如(若)」 + 語助「然」

① ～のようである

善養生者若牧羊然、視其後而鞭之。 —— 『莊子』

牧羊のようだ

如…者 (若…者) 動「如(若)」 + 語助「者」

① ～のようである

婦痛急、如欲生者。 —— 『三国志』華佗伝

生まれそうなようだ

[5] 然 + α 式

然則 指代「然」 + 順連「則」

① そこで、それならば

外者爲陽、内者爲陰、然則中爲陰。 —— 『素問』陰陽離合論篇

外は陽に属し内は陰に属す、そこで中を(三)陰とする

岐伯曰、脾脈土也。…帝曰、然則脾善惡可得見之乎。——『素問』玉機真藏論篇

脾脈は土です…それならば脾（脈）の善悪は見ることができるか

然而 「然」＋転連「而」

① それなのに

工常先見之、然而不形於外、故曰觀於冥冥焉。——『素問』八正神明論篇

名医は常に先に見ているが（病は）外に現れていないので

其卒寒、或手足懈惰、然而其面不衣何也。——『靈樞』邪氣藏府病形

急に寒くなり、例えば手足は痺れてしまうのに顔面を露出していられるのはなぜか

雖然 讓連「雖」＋「然」

① とはいふものの

王之疾必可已也。雖然、王之疾已、則必殺我也。——『呂氏春秋』

王の病は必ず治るだろう。しかし王の病が治ったら必ず私を殺すだろう。

然後 「然」＋名「後」

① それから、こうして

必先知經脈、然後知病脈。——『素問』三部九候論篇

必ず先ず四時の脈を知って、それから病脈を知ることができる

凡治病必先去其血…然後寫有餘、補不足。——『素問』血氣形志篇

治病には必ず先ずその（苦痛を和らげるため）血をとり、それから補寫を行う

四時有序、五穀乃化、然後厥氣在下。——『靈樞』脹論

四時には秩序があり五穀はこれによって生じ、こうして人体の正常な気は下へ送られる

使然 動「使」＋「然」

① そうさせる

内舍五藏六府、何氣使然。——『素問』痺論篇

痺が藏府に宿るのはどんな気を受感することによってそうなるのか

夫百病者多以旦慧、晝安、夕加甚、何也。…四時之氣使然。

『靈樞』順氣一日分為四時

すべての病気は朝は軽く、昼はまあまあで日が暮れると重くなるのはなぜか。…一日の中の四時の気がそうさせるのだ

不然 否副「不」＋「然」

① そうではない

此恬憺之世、邪不能深入也。…當今之世不然。 ——『素問』移精變氣論篇
今の時世はそうではない

[6] **若＋α** 式

若夫 転連「若」＋語助「夫」

① 一方～にいたっては（かの～のごときは）

於此有人、四支解墮、喘咳血泄。而愚診之、以爲傷肺。…若夫以爲傷肺者、由（猶）失以狂也。 ——『素問』示從容論

ある人が四肢に力無く、喘咳し血便しました。小生（雷公）は診察して傷肺と思いましたが。…お前が傷肺と思ったのは過ちではずれている

② ～といえ（もしそれ）：発語の辞

若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量、切循而得之、其死、可解剖而視之。
『靈樞』經水

身長八尺位の人であれば、体は眼前にあり、外からでも計測し、ふれることも出来、死ねば解剖して視ることもできる

若是（此） 動「若」＋代「是（此）」

① このような（である）

五音不彰、五色不明、五藏波蕩。若是則内外相襲、若鼓之應桴、響之應聲。
『靈樞』外揣

聴覚・視覚に異常があり、五蔵に病変がある。このような時は内外あい通じて、鼓がばちに応え、反響が声に応えるようだ

寫其有餘、補其不足、陰陽平復、用針若此。 ——『靈樞』刺節真邪

その余り有るを写し、その不足を補い、陰陽を平復する、用針はこのようである

若…若… 選連「若」＋動の連用

- ① あるいは～し、あるいは～する

中士聞道、若存若亡。 ——『老子』41章

中士が道を聞くとあるいは覚え、あるいは忘れる

(高亨『老子正詁』亡読爲忘、二字古通用。)

「察後與先、若亡若存」者、言氣之虛實、補瀉之先後也。 ——『靈樞』小針解

「後と先、亡いか存るかを察し」とは気の虚実補瀉の先後をいう

言「實與虚、若有若無」者、言實者有氣、虚者無氣也。 ——『靈樞』小針解

正邪之中人も微、先見於色、不知於其身、若在若無、若亡若存、有形無形、

莫知其情。 ——『靈樞』官能

正邪が人に中るときは微かで、先ず色に現れるが自覚はなく、在るのか無いのか、

亡いのか存るのか、形が有るのか無いのかその状況を知ることがない

乃若 転連「乃」＋「若」

- ① ～にいたっては

乃若張仲景、王叔和、啓玄子、皆醫之宗也。 ——『医史』

乃若世傳辛熱金石毒藥、治諸吐瀉下痢、或有愈者、以其喜開鬱結故也。

『素問玄機原病式』

世に伝わる辛熱金石など性味の強烈な薬物は各種の嘔吐下痢症状の治療に用い

られ、時に効果があるのは、それらがよく鬱結を散開するからである

若為 疑代「若」＋語助「為」

- ① どのように、どのような

食糧乏盡若爲活。救我來。救我來。 ——『樂府』隔谷歌

食糧がなくなればどうして生きよう。たすけてくれ(來は祈使語気)

莫若 否副「莫」＋動「若」

- ① ～におよぶものはない

衣莫若新、人莫若故。 ——『晏子春秋』

衣類は新調に、人は旧知にまさるものはない

[7] 不(非、無) + α 式

自非… 仮連「自」 + 否副「非」

① もし～でなければ

自非才高識妙、豈能探其理致哉。 — 『傷寒論』序

もし才高識妙でなければ

自非盡君子隨時反中之妙、寧無愧於醫哉。 — 『局方發揮』

もし君子の隨時反中の妙を尽くすのでなければ医家として恥ずかしくはないか

不亦…乎 否副「不」 + 語気副「亦」…疑助「乎」

① なんと～ではないか (反問句)

不亦離道遠乎。 — 『靈樞』玉版

道を離れて遠いのではないか

上古有大椿者、以八千歳爲春…衆人匹之、不亦悲乎。 — 『莊子』

上古の大椿は八千年を春とした…衆人を比べればなんと悲しいではないか

得無…乎 動「得」 + 否副「無」…「乎」

① ～ではあるまいか (反問句)

先生得無誕之乎。 — 『史記』扁鵲列伝

私を揶っているのではないか

無乃…乎 「無」 + 語気副「乃」…「乎」

① 恐らく～のではないか

無乃天下笑乎。 — 『呂氏春秋』

恐らく天下が笑うのではないか

不啻(翹)… 「不」 + 範副「啻」

① ただ～だけではなく

其心好之、不啻如自其口出。 — 『尚書』

口で言うだけではない

② ～の比ではない

陰陽於人、不翅於父母。 ——『莊子』

陰陽の人に対する（力）は父母の（命の）比ではない

③ ～ことにほかならない

下之正是救陰、攻之不啻補之矣。 ——『血証論』

攻法を用いて治療することは補陰にほかならない

[8] 方 + α 式

方今 語副「方」 + 名「今」

① ただいま

方今醫學失傳久矣。 ——吳尚先『理淪駢文』

現在（清朝末）外治医学（薬貼、水療、蠟療など）は失伝してすでに久しい

方将（且） 現在の時副「方」 + 未来の時副「将（且）」

① 現在（偏義）

方將食而有憂色。 ——『淮南子』

いま食べようとして憂色がある

我適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也。 ——『莊子』

私には幽憂の病があり、今はこれを治めるので天下を治める暇はない

[9] その他

因於 場所・原因の介「因」 + 対象の介「於」

① ～のために

因於露風乃生寒熱。 ——『素問』生氣通天論篇

露風のために寒熱を生じる

② ～を通して

四支皆稟氣於胃、而不得至經、必因於脾、乃得稟也。 ——『素問』太陰陽明論篇

全身の気は始め胃でうけるがそれは経脈に至らず、必ず脾を通して全身にいたる

猶且 頻副「猶」＋「且」(同義連用)

① あいかわらず

至於耄老、猶且居不求適。 ——『鼻对』

年老いてもあいかわらず住居に快適を求めない

② ～でさえも、やはり

管仲猶且不可召。 ——『孟子』

管仲でさえ召されなかった

且…且… 並連「且」の連用

① ～であり～である、～しながら～している

病在諸陽脈、諸分且寒且熱、名曰狂。 ——『素問』長刺節論篇

病が諸陽脈にあり、各部にも寒があり熱がある、これは狂である

員利針者…且員且銳、中身微大、以取暴氣。 ——『靈枢』九針十二原

円利鍼は一方が円、他方が鋭であり、中身は微大、暴気を取るのに用いる

比比

① 頻副「比」の畳用：しばしば

如此之候、年少壯盛之者比比、又非獨於老人也。 ——張志聡『中風論』

中風は年少壯盛の世代にもしばしばあり、決して老人だけではない

② 範副「比」の畳用：どこでも

疫癘終身不染者、比比皆是。 ——万密齋『医述』

一生疫病に感染しない者はどこにでもいる

云云 虚代「云」の畳用

① しかじか

即爲診脈、謂之曰「脈病云云」。 ——『金史』張元素伝

すぐに脈を診て「脈状病証はしかじかである」といった

「然後、厥氣在下」について

常用固定格式集(5) 然+α 式 然後 の例文に、『靈樞』脹論第三十五「四時有序、五穀乃化、然後厥氣在下」(1)とあるのを出したら、受講者から「厥氣」は医学用語ではないかと質問があった。

こちらは厥を指示代詞「その」と読んでいたので、宿題にさせてもらって、今回はその報告である。

「然後」を『素問・靈樞総索引』で調べて、内容が例文として問題ないとみれば払って列挙したのだが、今回はこちらに非がある。『総索引』の編集現場でも、この「然後」を「然後」として疑問を持たなかったからこそ、この「然後」の前後を取り上げたようだ。(1)

結論からいうと、この「然後」を文字通り解釈するためには「厥」を指示代詞と読むしか方法がなかったのである。「厥」を指示代詞に読むのは医史に有名な「若し薬、瞑眩せ弗れば、厥の病、瘳えず」(2)の例もあるので全然、抵抗はなかった。

(2)

だが、『太素』卷第二十九氣論・脹論にみえる同文の揚上善注(3)を見ると、「然後」を無視して「厥氣在下」を「有寒厥之氣、留於營衛之間」と解釈しており、上文とは切り離している。

はたせるかな『甲乙』卷之八五藏六府脹第三(4)では「然後」を「然而」に作る。上文までが健康な生理的機能についての叙述で、「然而」(しかるに)という転折連詞で「寒厥之氣」によって「脹」病態が作られるまでの病機を論じ始めるのである。

つまり、これは最後の例文としては不適切であるので削除訂正しなければならない。

脹論第三十五

黃

帝曰脹者焉生何因而有岐伯曰衛氣之在身也常然並脈循分肉行有逆順陰陽相隨乃得天和五藏

更始四時有序五穀乃化然後厥氣在下營衛留止

寒氣迎上眞邪相攻兩氣相搏乃合爲脹也黃帝曰

善何以解惑岐伯曰合之于眞三合而得帝曰善黃

書經卷之三

商書

說命中

若藥弗瞑眩厥疾弗瘳

五臟六府脹第三

黃帝問曰。脉之應於寸口。如何而脹。岐伯對曰。其至大堅直以清者。脹也。曰。何以知其藏府之脹也。曰。陰爲藏。而陽爲府也。曰。夫氣之令人脹也。在於血脉之中耶。抑藏府之內乎。曰。二者皆在焉。然非脹之舍也。曰。願聞脹舍。曰。夫脹者。皆在於府藏之外。排

工所敗。謂之天命。補虛寫實。神歸其室。久塞其空。謂之良工。曰。脹者焉生。何因而有名。曰。衛氣之在身也。常並脉循分肉。行有逆順。陰陽相隨。乃得天和。五藏皆治。四時皆欽。五穀乃化。然而厥氣在下。營衛留止。寒氣逆上。真邪相攻。兩氣相薄。乃舍爲脹。曰。何以解惑。曰。合之於真。三合而得。曰。無問虛實。工在

針灸 甲乙經 卷八

一一五

一、明知逆順，鍼數不失。一者，唯知補寫也。補虛寫實得中，故不失也。寫虛補實，神去其室，致邪失正，真不可定，粗之所敗，謂之天命。神室，心臟也。補實寫虛傷神，故神去心室。神去心室，得於邪氣，失其四時正氣，致使真偽莫定也。補虛寫實，神歸其室，久塞其空，謂之良工。神安其藏，故曰歸室。神得歸藏，自斯已去，長閉腠理，不令邪入，謂上工也。黃帝曰：脹者焉生，何因而有名？平按：《靈樞》無名字。岐伯曰：衛氣之在身也，常并①脈循分，行有逆順，陰陽相隨，乃得天和，衛氣並②脈循於分肉，有逆有順，從日循足三陽下爲順，從日循手三陽下爲逆，以衛行有逆順，故陰陽氣得和而順也。平按：《靈樞》常有絲字。《甲乙》分下有肉字，《靈樞》同。五臟更治，四時有序，五穀乃化。然後厥氣在下，營衛留止，寒氣逆上，真邪相攻，兩氣相薄，乃舍爲脹。五藏屬於五行，故五藏更主，四時寒暑次序得所，五穀入腹得有變化也。有寒厥之氣，留於營衛之間，營衛不行，寒氣逆上，與正氣相薄，交爭憤起，謂之爲脹。平按：

① 并：據《靈樞·脹論》當作「並」，與日抄本場注合。
② 並：原作「并」，據日抄本改。

②“厖”的古字。《庄子·天下》：“厖物之意。”陆德明释文：“厖，古厖字。”

10 厖 同“厖”。

厖

1 [jué <广韵> 居月切，入月，見。] ①石。《荀子·大略》：“和之璧，井里之厖也。”杨倞注：“厖，石也。”②病名。指突然昏倒、手足逆冷等症。《素问·厥论》：“厖之寒热者，何也？”王冰注：“厖，谓气逆上也。”汉张仲景《伤寒论·辨厥阴病脉证并治全篇》：“凡厥者，陰陽氣不相順接，便為厖。厖者，手足逆冷者是也。”《扬州评话选·李逢劫法场》：“如其要把他的臉看清楚，还要吓得厖过去哩。”参见“厖證”。③短。参见“厖尾”。④代词。其。(1)表示领属关系。《书·伊训》：“古有夏先后方愆厥德，罔有天災。”唐韩愈《祭柳子厚文》：“徧告諸友，以寄厖子，不鄙謂余，亦托以死。”清钱泳《履园丛话·梦幻·传闻之甚》：“錢氏据有兩浙，幾及百年，武肅以來，善事中國，保障偏方，厖功實鉅。”(2)起指示作用。《诗·周颂·噫嘻》：“率時農夫，播厖百穀。”《孟子·滕文公上》：“書曰：‘若藥不瞑眩，厖疾不瘳。’”唐柳宗元《封建论》：“厖後，問鼎之輕重者有之，射王中肩者有之，伐凡伯、誅襄弘者有之。”⑤助词。之。《书·无逸》：“自時厖後，亦罔或克壽。”《後汉书·班彪传》：“爾乃正殿崔巍，層構厖高，臨乎未央。”宋叶隆礼《辽志·本末》：“自時厖後，牛馬死損，詞訟滯淹。”⑥副词。乃。《史记·太史公自序》：“左丘失明，厖有《國語》。”《资治通鉴·晋海西公太和四年》：“后宫之女四千餘人，僮侍廝役尚在其外，一日之費，厖直萬金。”⑦助词。无义。《书·多士》：“誕淫厖厥。”唐韩愈《贈張童子序》：“能在是選者，厖惟艱哉！”蔡元培在北京政学会之演说：“战争最重要之品，厖惟军火。”⑧“厖”的古字。摔倒；挫败。银雀山汉墓竹简《孙臧兵法·擒庞涓》：“吾攻平陵不得而亡齊城、高唐，当術而厖。”⑨通“掘”。《山海经·海外北经》：“相柳之所抵，厖為澤谿。”郭璞注：“厖，掘也。”《汉书·淮阳宪王欽传》：“推原厖本，不祥自博。”⑩通“概”。断木。《庄子·达生》：“吾處身也，若厖株枸。”陆德明释文：“若厖，本或作概。”⑪姓。春秋吴有厖由。见《汉书·古今人表》。

厖 2 [jué <广韵> 九勿切，入物，見。] 见“突厥”。

色已變，四肢厥冷，口不能言。”《红楼梦》第九五回：“不料此回甚屬利害，竟至痰氣壅塞，四肢厥冷。”

【厖尾】短尾。宋刘攽《贡父诗话》：“今人呼秃尾狗為厖尾；衣之短後者，亦曰厖。”

⑨【厖昭】虫名。即蠹虫，蜻蛉虫的别称。《列子·天瑞》：“厖昭生乎溼。”

【厖逆】中医学病症名。(1)指手足厥冷。汉张仲景《伤寒论·辨少阴病脉证并治》：“少陰病，下利清穀，裏寒外熱，手足厖逆，脉微欲絕。”又《辨厥阴病脉证并治》：“傷寒六七日，大下後，寸脉沉而遲，手足厖逆。”(2)指胸腹劇痛，兩足暴冷，煩而不能食，脉大小皆澀的病症。参阅《灵枢·癰狂》。(3)指久久头痛的一种。参阅《素问·奇病论》。

⑩【厖陰】中医学名词。①经脉名称之一。是阴气发展的最后阶段，开始重新向阳的方面转化的过程。包括手厥阴心包经和足厥阴肝经。参阅《素问·至真要大论》，又《阴阳离合论》。②经穴名。属足太阳膀胱经，位于背部，当第四胸椎棘突下旁开1.5寸处。主治心动过速，心律不齐，咳嗽胸闷等。参阅《铜人腧穴针灸图经》。③六经病之一。厥阴病为阴阳消长、邪正进退的关键，常出现寒热错杂的症候。上热下寒者，有消渴，胸脘部灼热疼痛，饥而不欲食，下利，吐蛔等证。厥热胜复者，可预测病情的进退，厖多热少为病进，厖少热多为病退。参阅汉张仲景《伤寒论·辨厥阴病脉证并治》。

⑬【厖貉】春秋地名。在今河南省项城县西南。《春秋·文公十年》：“冬，狄侵宋，楚子、蔡侯次於厖貉。”《公羊传》作“屈貉”。参阅《春秋传说彙纂》。

⑭【厖證】中医学病症名。泛指突然昏倒，不省人事，逾时苏醒的病症。有以六经脉形症立名的巨阳、阳明、少阳、太阴、少阴、厥阴之厖，见《素问·厥论》。又有暴厖、寒厖、热厖、尸厖、薄厖、煎厖等名称。见《素问·厥论》，又《大奇论》，又《生气通天论》等篇。也指四肢寒冷。见汉张仲景《伤寒论·辨厥阴病脉证并治》。后来又又有痰厖、食厖、气厖、血厖、蛔厖、暑厖之分。

11 厖 同“厖”。

厖

同“厖”。